
モノもち

テイク

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノもち

【Nコード】

N1854L

【作者名】

テイク

【あらすじ】

心を込めて使った物には魂が宿る。

平凡な高校生望月透。彼は物を大切に使い大切に作る心優しい少年。そんな彼に舞い降りたささやかな奇跡。壊れるまで使った物が人間になるという。

これは人間になった物達と彼の物語。

プロローグ（前書き）

この小説は物をすぐ捨てる現代社会の人々に物申す小説です。

嘘です

プロローグ

神様がいたとして神様はきつとこの小さな世界に物を作りすぎてしまったのだろう。世界には物が溢れすぎている。それを良いとも悪いとも言わないけれど物にとつてはそうも言えない。今の物が溢れた世の中にはいくらでも変わりはある。まだ使えるのに新しいのが欲しいから捨てる。いらないから捨てる。必要ないから捨てる。人間達の勝手な都合で物は捨てられる。

僕の名前は望月透^{もちづきとおる}。平凡をそのまま人の形にしたような人間だと自負している。二点を除いて。それは物持ちがいいこと。それだけは他の人間とは一線を画す。もう一つは物集めだ。まだ使えるのに捨てられている物を見るとどうしても拾いたくなること。

なんでこんな話をしたのかと言うとこれらのせいで僕が体験した不思議な出来事を語るためだ。いや、体験したと言うよりは今も現在進行形で続いているこの出来事を。

荒唐無稽、奇々怪々。そんな言葉で表すのがぴったりなまるで夢のような出来事。語り尽くせば日が暮れるけれど語ろう。誰にも語りたくなくて、誰かに語りたいそんな出来事を。

これは僕に降りかかったちょっとした奇跡の話。

そして僕と彼女たちの話だ。

どこから話始めようか。やはりあの日、僕がひいきにしている古道具屋古幻堂を訪れた所からにしよう。それなら僕についてもっとわかるだろうから。

じゃあ、始めよう。季節は夏、7月21日。属に夏休みと呼ばれる長期休暇の初日。僕は朝早くから古道具屋古幻堂へと向かった……

ブログ（後書き）

次の更新予定は未定。出来次第あげます。

感想をお待ちしてます。

批評は一切受け付けません。メンタルの弱い作者が死にます。

第一話 出会い

季節は夏、7月21日。夏休み初日だ。太陽が熱心に地面を照らし地球温暖化の影響もあり気温が上がり上がった日。こんな日は家の中でエアコンに当たって涼むのが常識だが僕は今外でアスファルト舗装路という夏と相性最悪の道を歩いていた。

「あち」

ここは砂漠なのではないかと言うくらい暑い。

「地球温暖化マジでなんとかしないと」

そんな事を考えてしまう暑さの中どこに向かっているのかと言うと僕がひいきにしている古道具屋の古幻堂に向かっているのだ。僕が古幻堂をひいきにするのは品揃えが豊富で尚且つ安いからだ。

言うておくが古幻堂に来るのは僕が貧乏だからではない。むしろ逆だ。僕の家はお金持ちである。今は僕は実家から遠い高校に通っているので一人暮らしだが仕送りは余りある程だ。

そうこうしている間に古幻堂についた。早くこの暑さから逃れなくて古幻堂の中に駆け込む。中は冷房のきいた快適空間だった。それと同時に古道具の匂いがする。店内は薄暗い。

「こんにちは源さん」

「おお、透君かいらっしゃい」

店の奥のカウンターに座っている白髪の老人が店長の源さんだ。

97歳なのだがバリバリ元気な町内で有名な老人。

「何か新しい物は入りましたか？」

「そうだな。その辺のタンスは昨日入った奴じゃ」

入り口付近に置かれたタンスを見る。所々傷があるが使えない程じゃない。いい木を使ってるようだし。

「勿体ないな」

「本当に透君は今時珍しい子じゃな。今時の子供はすぐ新しい物を欲しがる。なのに透君は違う。なぜじゃ？」

「いつも言ってるでしょ源さん。まだ、使えるのに使われずに朽ちていくのは物が可哀想だって」

このタンスだってまだ使えるのに可哀想だ。

「そうじゃったそうじゃつな。それで今日は何を探しに来たんじゃ？」

「本棚が欲しいんだ」

「本棚か、確かあそこじゃ」

源さんの指差した所に行く。古い本棚がいくつかあった。まだどれも充分に使える。

「でもデカいな」

これじゃ持つて帰れない。

「何儂が運んでやるから安心せい」

「助かります。じゃあこの黒いのを貰います。幾らですか？」

「いつもひいきにしてもらつとるからな配達代も込みで二千円じゃ」
「ありがとうございます。はい二千円」
「毎度。では、行くとするかの」

源さんが本棚を持ち上げた。本当この人が97歳とは思えない光景だ。源さんは本棚を外にだしリアカーに乗せた。

「お前さんも乗りな」

「でも」

「いいから」

「はあ」

源さんに言われた通りリアカーに乗る。

「しつかりつかまっておくんじゃぞ」

わけのわからないまま源さんの指示に従う。

「出発じゃ」

物凄い速度でリアカーが発進した。例えるなら某スペースなアミューズメントパークのザターンの発進とほぼ同じ感じた。これ何人の人がわかるのかな。

行きは三十分かかった道のりをたった五分で源さん×リアカー＋本棚＋僕は走破してしまった。本当源さんは凄い人だ。

「ふいゝ、着いたぞい」

「ありがとうございます」

「で、どこに持って行くんじゃ？」

源さんが本棚を抱えながら言う。

「こつちです」

家は一軒家だ。両親が建てた二階建ての家。その二階の僕の部屋に運んでもらった。

「ありがとうございます」

「いいんじゃないよ」

「麦茶でも飲んで行きますか？」

「いや、よいよい。忙しいんでな」

失礼だが古幻堂が忙しい所を見たことは一度もない。

「じゃあまた今度」

「ああ、おっとそうじゃ。もうすぐ始まる、ようやく始まる」

「何が始まるんですか？」

「何、直にわかる。さてといつまでも物を大切にな」

源さんはそう言って帰って行った。

「何だっただんだ？ まあ、いいか」

気にはなるが気にして何か変わるわけでもないので気にすること
を止め家に入った。

「さて、物は心を込めて使い続ければ魂が宿る。さて、どうなるか」

源さんがリアカーを押しながら呟いた。その後ろには数人の女性達が連れ添うように歩いていた。

「さてと、とりあえず片付けよう」

部屋に散乱していた本を買ったばかりの本棚に入れる。片付け終わったときには昼頃になっていた。

「ふう、よし。これからよろしくな」

軽く本棚を叩きながら言った。それからリビングへ。リビングにあるのは殆ど古幻堂で買った古道具。まだまだ使える物ばかりなんだから勿体ない。別にドケチというわけじゃない使われないまま朽ちていくのが可哀想なだけだ。

「さてと昼ご飯でも作るか」

材料を確認するために冷蔵庫を開ける。料理はそれなりに出来る。一人暮らしだからな。

「うーん、ミートパスタでもつくろう」

材料はパスタ、サラダ油、鷹の爪、にんにく、豚ひき肉、玉ねぎ、ピーマン、醤油、酒、トマトケチャップ、顆粒コンソメ、塩・黒こしょう、砂糖。簡単な奴だけだね。レシピは昔パソコンで調べたりした。

「さて、作るか」

まずは下ごしらえだな。鷹の爪は種をとって輪切りにしてニンニクはみじん切りにし玉ねぎは粗みじん切り。ここでパスタを茹で始めてつと。次はフライパンに油を熱し鷹の爪とにんにくを弱火で炒め香りが立ったらひき肉を加えて中火で炒める。火が通ったら玉ねぎを加えて炒め醤油、酒、トマトケチャップ、顆粒コンソメ、塩・黒こしょう、砂糖を加えて炒める。茹であがったパスタをこれに加えて、よく和えて完成だ。

「よし、完成。じゃ、いただきます」

うん、うまい。

「さてと宿題でもしよう」

片付け終わったので宿題でもすることにする。ここで終わらせてた方が後々楽な気がする。なにか嫌な予感がするんだよね。ここで終わらせないと終わらせられなくなりそうな予感が。そんなわけはないと思うが我が家の家訓、直感にはとりあえず従えを忠実に守っておこうと思う。愛用のシャーペンを持ちはじめ。

・
・
・

バキッ

「うわ」

シャーペンがぶっ壊れた。

「クソもう寿命か」

これ気に入ってたんだよな。小学三年生から使い続けて八年。僕の人生の半分を共に生きてきたシャーペン。それが壊れたのだ。

「……………」

それをそつと仏壇に。これ壊れた道具専用。せめて僕だけでも供養してやろうと思ってな。つくづく変人だと思うよ。これに関しては。

「今までありがとうな」

そう言った瞬間シャーペンからが放射される。

「うわ!!」

目が開けられないほどの光の奔流。そしてそれが収まったときそこには女の子がいた。

「は!?!」

なにこの状況。おかしい明らかにおかしい。何があった。シャーペンが光ったと思った途端女の子が出てきた。

「あゝおにいちゃんだ!!」

ますますわけがわからん。僕に妹なんていない。それにこんな子知らない。それにシャーペンが無くなっている。

「お、お前は誰だ？」

「誰ってさっきまでお兄ちゃんと一緒にいたじゃん」

「そんなわけないだろ。お前いなかっただろ」

「いたよ。あゝ、お兄ちゃん状況わかってないよね」

「聞くまでもなくな」

「えっとわたしシャーペン」

「は！？」

まで、コイツ今なんていったシャーペン、うん。確かにそういつた。……………はあ！？

「お前人間じゃねえか。どこをどう見たらシャーペンに見えんだよ」

「うん、人間になった」

「……………はあ！？」

人間になったってなんだそれはどんな超常現象だ。誰かここに来て説明してくれ。いや、こられたら困る。家に見知らん幼女下手すりや捕まる。

「えっとじゃあ、説明しますね。お兄ちゃん」

「とりあえず頼む。なっとく出来るのを」

「うん、えっとわたしはそうですねゝん 九十九神と呼ばれるものですね」

「九十九神？」

「はい、えっと確か、長年大切に使った道具には魂が宿るといいますよね。それが人間の姿をとったのがわたしです」

……………さて、まったくわからない。ただの電波少女なのかもしれないのかもしれないし。

「だが、九十九神って普通長い年月が経ったものになるんじゃないのか？」

「……………」

「おい」

「で、でもでも、わたしおにいちちゃんのシャープペンだよ!!」

「それを証明する証拠はあるか？」

証拠があれば信じるしかない。

「証拠？ え〜つとね、ん〜？ じゃあ、お兄ちゃんしか知らないことを言えば信じてくれる？」

「ああ」

「そうだね小学三年生のときわたしをなくした時どぶの中まで探してくれました。そしてわたしを見つけたのは自分の筆箱の中」

「なんで知ってる」

そんなこと誰にもいったことないぞ。しかもそれが僕のミスだったことなんて誰にも言っていないぞ。

「そりやお兄ちゃんのシャープペンだったからですよ」

これは本当に信じるしかないようだ。

「……………酷く複雑な感じた。自分のシャープペンと話してるのって」

「そうですね〜。あ、そうだ言うの忘れてました」
「なんだ？」

シャーペン少女が真剣な顔で言った。

「壊れるまで最後まで大切に使ってくれてありがとう」

こう言われたときああ、こいつは本当にシャーペンだったんだな
と思った。

第一話 出会い（後書き）

はい、妹シャーペン登場。

なぜ妹キャラというとシャーペンが新しいものだからです。古いもののほどだんだん年が上がります。次回ではもう一人擬人化するはず。でも何が擬人化するか決めてない。あれとかあれとかいいと思うんだけどな。

第二話 命名、そして二人目

そんなわけで僕の家に新しい住人が増えました。いや、増えたかどうかはわからないけど。もとからいたわけだし。この白いワンピースを着たシヨートの黒髪の小柄な妹系元シャープペンシル少女は。さて、どうなることやら。

「じゃあ、お兄ちゃんこれからよろしく」

「あ、ああ」

ああ、いまさらながら思うなぜこんな状況に陥ったのだろうか。それともこれは神様が与えた何かなのだろうか。そしたら神様僕になにを望んでいるのか。

「そうだ、名前付けてよ」

「名前ないのか？」

「当たり前でしょ。わたしシャープペンだったんだからね」

いや、そんなこと言われてもな。

「あゝそうだなシルはどうだ？」

「いいです。シルで」

あっさり決定。名前の由来？ シャープペンシル。ここまで言えばわかるだろう。そのまんまだ。あまり僕にネーミングセンスを求めないでくれ。本当にセンスないから。本当ですよ。

「さつてと、これからどうしよう」

本当にどうしよう。マジでどうしよう。部屋は開いているのだ住む分は関係ない。問題はもしこれが親にばれた場合。

「どうやって言い訳しよう」

これ端から見たら誘拐だよな。家に知らない女の子がいるのって元シャーペンっていつても信じてくれないだろうし。さて、どうしよう。

「お兄ちゃんどうしたのそんな難しい顔して？」

「いや、ちよつとね」

「ふゝん」

「てか、思ったけどなんでお兄ちゃん？」

「えつと人生の半分を一緒に生きてきたんだからもうそれはおにいちゃんって呼ぶしかないでしょ」

「……………こいつアホだ。」

「いま、シルのことバカにしなかった」

「いや」

鋭い。シャーペンだからか意外にするどい。

ぐう

「ん？」

シルが真っ赤になってる。

「腹減ったのか？」

「……………うん」

「とりあえず夕飯にするか。これからのことはこれから決めよう」

「うん」

「つとそつだ、もしかしてお前みたいなのまだ出てくる可能性あるの？」

「あるよ。だってお兄ちゃん物持ちいいし。どんな子^{もの}も大切にしてたし。壊れるまで最後まで使ったらたぶんわたしみたいにでてくるんじゃない？」

「マジか」

これ以上増えたら洒落にならないぞ。とか言ってるそばから。

バキッ

「あ」

「あゝ」

ホウキが折れました。なぜに！？ てか、たてかけてあったホウキ触っただけだぞ。寿命って本当にあるのかよ。

「寿命だったんだね」

「いやなタイミングだろこれ」

やはりというかなんというかホウキが光を放ち。そこには女の子が立っていた。

「はゝ」

「あははは、ナイスタイミング」

さて、これはどういふことなのやら。こいつらについてはもう本

当に信じるしかない。

「ここまで使っていたきありがとうございます透様」

「さ、さま!？」

「はい、主人に様をつけるのは当たり前です」

「それなんだけと様はやめてくれ」

「わかりましたそれなら透さんと呼びします」

今度はホウキが擬人化。腰まである茶髪をひとつにまとめていて全体的にシックな服装で茶色の長袖に黒のロングスカート。こんどはシルと違って大人びたお姉さんという感じ……いや、お母さんか？ そんな印象を受ける。

「透さん、今失礼なこと考えませんでした」

「いえ!！」

怖い、笑顔なのに怖い。絶対この人怒ると怖い。注意しよう。

「それでは名前をいただきたいと思うのですが」

「あ。ああ」

さて、どうしよう。

「じゃあ、キクで」

「キクですかありがとうございます」

よかった気に入ってくれたようで。

「ね、二人目でたでしょ」

シルが笑い顔で言う。ああ、本当だったよ。

「はあ。キクも一緒にご飯食べるか？」

「ええいただきます」

「ああ、じゃあ、ちよつと待っててくれ」

さて、三人分だからな。材料足りるかな。……………足りなさそうだな。

「ちよつと買い物行って来る」

「それなら私も行きます」

「ずるいわたしも!!」

そんなわけで三人全員で買い物に行くことに。シルお前はおなかすいてるんだよな。

・
・
・

買い物では知り合いに会わないように警戒しながらだったので余計に疲れた。結果誰にも会わずに買い物を終えることが出来た。シルが余計なものを買おうとするし。キクは安いものを選んでくれた。これはうれしかった。新しいシャーペンを買った。なぜかシルが選んだのだが。元シャーペンだからいいのがわかるのかね。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまー!!」

「おそまつさまでした」

はい、夕食終了。

「透さん、お風呂がわいているので入ってきてもいいですよ」

キクが言った。

「いつの間に」

「透さんが夕食の用意をしているときにです」

手際がいいな。

「ああ、じゃあ、入る」

「シルも!」

「駄目です」

「ぶ」

頬を膨らましたままのシルをキクに任せて僕は風呂に。

「ふう」

落ち着く。何か今日は本当にいろいろあった。

「でも、まあ、なんだろうね」

あいつらといるのは悪い気はしなかった。

「でもまあ、あいつらが增えるってことはモノが壊れるってことだからな」

ふと風呂場を見回す。洗面器、シャンプーなどの石鹸類、髪を洗う裸のシル、シャワー。

.....え？

「洗面器、シャンプーなどの石鹸類、髪を洗う裸のシル、シャワー」

.....。

「何でここにいるシル」

「えへへへ、お兄ちゃんと一緒に入りたくて」

「すみません、こちらにシルが行ってま.....」

キクまでやってきてしまった。

「.....シル行きますよ」

「ああ、ちょー!!」

容赦なくキクがシルをつれだした。

「.....はあ」

騒がしくなりそうだな。

風呂を上げる。

「お前たちも入ったらどうだ？」

「はいでは。行きますよシル」

「はーい」

ふう、これから本当にどうなるのだろうか。これからもあいつら
みたいなのは増えるのだろうか。

「まあ、そのときに考えよう」

当面の問題は……。

「親にどう説明するかだな」

それは本当にどうしようもない問題だった。

第二話 命名、そして二人目（後書き）

おかあ…………お姉さん系ホウキ登場
年順

キク>シル

第三話 新生活にまぎれて三人目が出てきたり出てこなかったり？

朝、目が覚めると僕はリビングの床で寝ていた。どうやら寝ていたソファから落ちたようだ。なぜ、こんな場所で寝ているのかというそれは家に増えた新しい住人のせいである。この家は部屋はあるのだが寝具やその他もろもろの家具がない。僕の一人暮らしなのだ当たり前のことだ。それで寝る場所に困ったのだ。一緒に寝るわけにもいかないので僕の部屋のベットを貸して僕はリビングのソファで寝たというわけだ。

「うっ、体中が痛い」

硬い床で寝たせいだろう。体中がきしきし言ってる。

「まあ、あの二人にこんな思いをさせるよりはいいか」

どこまで行ってもお人好しな僕。いつかこれで痛い目を見そうだよ。

「とりあえず着替えるか」

……………そこで気がついた。着替え僕の部屋だよ。そして今僕の部屋にはシルとキク、つまり女の子が二人寝ています。

「どうしよう」

着替えなければなにも出来ないわけではないが。

「着替えたほうがいいだろう」

そんな格好である。あとで着替えることも出来るが。さて。

「行くしかないな」

別にやましい気持ちからじゃないぞ。こんな格好しているときに誰か来たら困るからだ。それにご飯も作らなければいけない。別に寝ている間に部屋に入るだけだ。そう入るだけ別になにかしようつてワケじゃない。何か害があるわけじゃないし。気づかれなければいいだけだ。それに着替えを取るだけそう取るだけ。

よし、前振り終了。任務^{ミッショ}自分の部屋に誰にも気づかれずに入る。

任務^{ミッショ}スタート。

「進路クリア」

ほふく前進で廊下を進む。端から見ると変態だな。まったく誰だよこれ。

「目標のポイントを発見」

物音はしない。まだ寝ていると思われる。さあ、行くぞ。本当変態だよな、これ誰だよ。まったく最悪だよな。

ガチャ、ギ

扉を開ける。そこから中を覗く。二人ともまだ寝ている。そつと中に入る。

「任務コンプリート。潜入成功」

第二任務、二人を起こさずに着替えを取る。

「そ〜つとそ〜つと」

二人を見ながらクローゼットに移動する。二人ともよく寝ている。
うん、女の子が寝てる姿っていいよね。

「よし」

クローゼットから着替えを取り出す。

「任務完了」

第三任務、誰にも気づかれずに写真を撮る。

別に変態的行為ではない。この元道具たちの生態を解明することが今の僕の使命であって僕のこの現状を解明するのにも役に立つからだ。それに誰かに公開するわけでもない。思い出にもなるわけだし。気づかれなければいいだけだ。可愛く撮るし。

うん、前振りてか言い訳終了。てなわけで撮影開始。

「ふつ」

よし。任務成功。

「これでよしと」

携帯のカメラで写真を撮った。気づかれてないはずだ。よく寝てたし。うん。可愛く取れたな。

第四任務、^{ミッシェン}誰にも気づかれずにこの部屋をでる。

「簡単だぜ」

「お兄ちゃん??」

ビクウ!!

「ん〜ムニヤムニヤ」

なんだ寝言か。危ない危ない。今のうち今のうち。

部屋をでた。

「ふう、^{ミッシェン}任務完了。帰還する」

リビングへと戻った。携帯のデータはパソコンにも保存してつと。他にもバックアップをとってとよし。

「さて、着替えたし。ご飯の用意しよう」

いい朝だな〜。

・
・
・

「さて、出来たな」

他の人の分まで作るなんて初めてだな。昨日は混乱してて考える

暇なんてなかったし。

「うゝ、おはよゝ」

考えているとシルがおきてきた。

「ああ、おはよ」

「おはようございます透さん」

「ああ、キクもおはよう」

さてと、既に朝食の準備は出来てるので食べる。

「おっとそうだ、お前ら今日暇か？」

「暇」

「暇です」

「なら、買い物行くぞ。これからいろいろ必要になりそうだからな」

その言葉にシルが反応する。

「やた、買い物！！ お兄ちゃんと買い物！！」

「よろしいのですか？」

「ああ、遠慮するな。お金は有り余ってる」

本当に有り余っている。

「では、お言葉に甘えて」

てか、なんだろうね、キクって年の……いや、考えるのはよ
そう。

その後準備をして買い物へ。目的地はデパートだ。ここなら服と
かもそろつし。一気にそろえてしまったほうがいいだろう。

「とりあえずすきなを選んできてくれ」

「うん」

「では、行つてきます」

キクとシルは店の中に。今は服売り場＋下着売り場だな。これば
つかりは僕にはわからない。それに入ったら変態だし。

・
・
・

三十分後。女の買い物は長いと理解した。

「買って来たよお兄ちゃん！！ ほら！！」

「見せていい」

とにかく買ったことは確認。

「さて、次は家具か。行くぞ」

「お〜」

そんなわけに必要なものを買いに家具売り場へ。ちなみに待つて
いる間に日用品は買い揃えました。

「おお〜」

シルは驚いてばかりだ。

「さてと、まずはベットとかか」

元が下宿所だったのかなんだか不明だが僕の家は部屋だけが多い。
で、和室と洋室半々あるわけだ。まあ、今はそれがありがたい。

「シルはベッドがいいな」

「私は和室で」

「はいはい」

そんなわけでそれぞれ必要なものを買っていく。といってもそんなにはない。そんなに広い部屋でもないからだ。

・
・
・

「さて、必要なものは買ったな？」

既に夕方だ。デパートで昼食をとり買い物続けた。やはり実感
女の買い物はながい。

「はい」

「ええ」

「じゃあ、帰るか」

知り合いに会わないように警戒しながら帰る。思ったのだがこい
つらが余計なことさえ言わなければバレてもよくないか？

「おや、透君ではないか」

源さんに鉢合わせしてしまった。

「源さん！？」

「透君も隅に置けないね。こんな可愛い子を二人もとは」

「え、いや違いますよ」

「ふふ、隠さなくてもいい。さて、じゃあ、邪魔な老いばれは表舞台から去るとしよう」

「え？」

すれ違いざま、源さんが呟いた。

「……………大切に使われていたようじゃな」
「え？」

よく聞こえなかった。何を言ったのか聞こうとしたが既に源さんは人込みにまぎれて消えていた。

「あの人まさか？」
「でもそんな」

二人がなにやら驚いた様子だ。

「どうかしたか二人とも？」
「なんでもない」
「なんでもないです。たぶん気のせいです」
「そうか？」

疑問は残るが考えてもしかたがない。僕達は再び歩き出した。

「ふう、さてと、まだまだ、始まるには時間がかかるな」
「マスター」

「大丈夫じゃ」

源さんに数人の女性が寄り添っている。

「さて、いくとしようか」

源さん達はいずこかへと消えた。

「ただいま」

「ただいま」

「ただいま帰りました」

それぞれ個性がでただただまだ。さて、誰が誰かわかるかな。

答えは一番上から僕、シル、キク。簡単だったな。

「おかえり」

「へ？」

……………かえってくるはずのない返事が返ってきた。家の中を見るとグレーブルのショートヘアと同じ色の瞳を持ち僕より1、2歳年上の女の子が居た。青と白を基調としたゆったりとしたローブのような服を着ていて袖は手が見えないほど長く、裾は逆に太ももが見えるほど短い。真っ白な肌がなんとも言えない色気をもし出している。そして思う、ああまたか、と。

「壊れるまで、最後まで使ってくれてありがとう」

素っ気無くその女の子は言った。抑揚の乏しい声だ。

「それで、君は？」

「元冷蔵庫」

「マジで？」

コクリ

女の子は頷いた。

「つてことはついに壊れたわけか」

コクリ

やっぱりか。

「とりあえずバッド電気で冷蔵庫注文しよう」

電化製品はさすがに新品を買う。そして壊れるまで大切に使う。

「なんとか今日中に持ってきてくれるらしい」

よかったよ。

「んじゃあ中の食材とかは？」

「凍らせた」

リビングに行くと氷付けにされた食材があった。

「どうやったの？」

「私冷蔵庫、冷やすのが仕事で、能力^{ちから}」

あれ、冷蔵庫の時よりパワーアップしてね？ キクとシルはそんなことないのに。

「どんな力を見せてくる？」

コクリ

元冷蔵庫娘の手に透明な剣が現れる。

「冷たいこれ氷だ」

「ほえ」

シルが舐めようとて。

「やめたほうがいいですよ」

キクが止めていた。とにもかくにもこれで三人目さてまた買い物か？

「でも、もう遅いからなお前の買い物は別の時でいいか？」
「いい」

それから何かを待つように僕を見る。

「？」

「お兄ちゃん名前だと思っよ」
「ああそっか」

シルに言われるまで忘れてた。

「そうだな、じゃあ、トウ力で」

名前の由来冷蔵庫……冷凍庫……トウコ。なんかそんな感じではないのでコを力に変えてトウ力に。わかりにくいね。

「トウ力……」

「いやか」

「いい」

気にいってくれたんだよね？ 表情が変化しないからわからない。

「さてと、とりあえず夕食にするか」

新しい家族の歓迎も兼ねて。

第三話 新生活にまぎれて三人目が出てきたり出てこなかったり？（後書き）

クールな冷蔵庫娘、トウカ登場。服のイメージですがパンドラハーツのエコーですね

そして主人公が変態になってしまった。どうしてこうなった。

まだまだ、擬人は増えるかも

第四話 学校

7月26日。夏休みに入り僕に新しい家族が増えた。全員が元は物というよくわからない状況だが。そして今日、今日は登校日というか補習開始日。補習といっても普通の授業と同じなので行かないと大変なことになる。数日だけがけっこう面倒だな。

さて、目が覚めると、なぜか、トウカが僕に抱きついていた。

「またか」

この二、三日でわかったことはトウカは異常に寝相が悪いこと。自分の部屋で寝ていてもなぜかいつもここに来てしまうのだ。寝相が悪いにも程がある。それに、スタイルがいいのだ現在思春期まさかりの男子高校生にとって有害以外なものでもない。

「おきてくれ」

「んゝ、やだゝ」

トウカは寝ているときと寝起きは性格が変わる。いつもはクールなのだがこの時はデレる。それはいいのだが。

「頼むからおきてくれー!!」

「ん? んんゝ、ふあゝ、おはよゝ」

まだ眠そうに目をこすっているトウカ。ダボダボの寝巻きでかなり可愛い。ってそうじゃない。

「はやく自分の部屋に戻ってくれ」

「うん」

はあ。トコトコと自分の部屋に戻っていったトウカ。

「さてと、起きて朝食をさつさと作るか」

着替えを済ませキッチンへ。

・
・
・

「よし、出来た」

朝食の準備完了。いつもどおりできたな。さてとあいつらを起こしに行くかな。元が物だったせいかわいづらは朝に弱い。夜に騒ぎすぎてるのもあるだろうが。人の部屋でいつまでもいつまでも。自分の部屋があるんだからそこで騒げばいいのと思う。とまあ、そんなことよりまずはあいつらを起こしに行かないとな。

まずはシルの部屋に入る。どうせ寝ているのだノックはしない。

「シル起きろー！！」

シルの部屋は洋室でかわいらしいもので溢れている。ベットとクローゼットとテーブルがありそのほかにはうさぎやらなんやらの人形がいっぱいおいてある。

「起きろー！！」

「うーん、あゝお兄ちゃんおはよ」

「ああ、おはよう。着替えて下にいったろ」

「はい」

まだ眠いのかフラフラしているが一応起きたようだな。

「さて次はキクだ」

しっかりとしているようで朝は弱い。

「キク起きろー!!」

キクの部屋は和室。完璧な和室だ。それ以外にいうことはない。

「ん？ ああ。朝ですか、申し訳ありません。朝はどうも弱くて」「いいよ。とりあえず着替えて下に行つててくれ」

「はい」

さて、最後トウカだ。さっき起き掛けてたから大丈夫だろう。

「トウカー!!」

トウカの部屋は洋室で全体的に青で統一された部屋だ。ペンギンとか置いてある。

「ん~~~~~」

「起きろ!!」

コイツが一番弱いんだよな。

「お~~~~ろ~~~~!!」

「むあ？ あ~~~~ふあ~~~~」

「起きたか？」

「ん、おはよ透」

「ああ、着替えて下にこいよ」
「うん」

全員起こしたところでキッチンへ。しばらくして三人とも降りてきた。それから朝食を食べて。

「そういえば透さん今日は制服ですね」

キクが僕の服装を見て言った。

「そうだね、お兄ちゃんどうして？」

「今日から補習なんだよ」

「へ、わたしも行きたい」

シルが言った。

「駄目」

「え！ どうして」

「遊びに行くんじゃないしシルがいける場所でもない。帰ってきたら遊んでやるからみんな今日はおとなしく家に居てくれ」

「む、わかった」

「わかりました」

「……わかった」

みんな聞き分けが良くて助かるな。そんなわけで家をでて学校へ向かう。

「お、い、透！！」

僕に声をかけて来たのはちゃらけた男。

「よう、葉」

こいつは佳山葉、同じクラスの友達。不本意だが悪友とも言つ。

「なあ、なあこんな噂があるんだが」

「なんだ？」

「お前に似た奴が女の子連れて歩いていたというな」

……………。

「そんなわけないだろう」

「本当か」

「そうに決まってるだろう」

「まあ、それもそうか。お人好しの透君だし」

「なんだそれは」

「それにしても夏休みまで補習つてのは勘弁してほしいぜ」

確かにな。

「だが、まあ、数日だ我慢しろ」

「ちえ」

はあ、危ない危ない。それにしても誰に見つかったんだ？ 誰にも見つからないようにしてたのに。今度はもっと気をつけよう。見つかったらそうだな、下宿人とでもしよう。ちよど民宿だったよな家だ問題はあるまい。

「ほら、急いぜ」

「そつだな」

学校へ。教室に入ると女子一人しか来てなかった。

「なあ、香奈ほかの奴らは？」

「全員サボリ」

こつ答えたこのセミロングの茶髪えとつかなの女子は江藤香奈、葉と同じく友達。

「全員さぼりって……」

僕達以外全員サボりって。

「どんだけ不真面目なクラスなんだよ」

「それは私が聞きたいわよ」

「まあ、俺たち三人だけなくなるかもしれないだろ」

と楽観的に言う葉に香奈が言う。

「あの担任の性格を考えたことある？」

「あの担任なら僕達だけでもやりそつだよな。差をつけろって」

「あゝ、何で俺たちの担任あんなんだよ」

「校長に聞きなさいよ」

香奈の言つとおりだ。

「そつだ、香奈お前が担任にセクハラされたつて言えば――」

「却下。何で私がそんなことしなきゃいけないの？ 他に頼みなさいよ」

「——他に居ないから言っただろうが」

「あんたいろんなところで女子に声かけてんだからいくらでもいるでしょうが」

「いねえよ!!」

いや、あの顔は居るな。

「まあ、落ち着けとりあえずどうするかだな」

このまま補習を受けてもいいがさすがに三人つてのはきついな。

「家族を呼ぶ!!」

葉が言う。家族ね。確かにそれは楽だな。って無理だよ。

「呼んでどうすんのよ」

「なら、友達を呼ぶ」

「だれも来ないわよ」

「透!! 誰か呼べる奴はいないか!!」

いるにはいるんだがな。あいつら三人。まあ、無理だ無理。だって、元物だぞ。絶対に来たら問題になる。

「いるわけないだろ」

「じゃあ、どうすんだよ!!」

「それを今考えてんしょうが!!」

さて、あまりしてると担任が来るからな。これでこの惨状を見たらどう思うか。まあ、想像には難くない。だって三人しかいないのだ。これでは誰でも同じ反応を示すだろう。

「透何かいいい案はないか!!」

「いい案はないの!？」

「ちよつとまで二人同時に言っな」

さて、どうしよう。

「逃げるか？」

葉が言う。逃げるってなあ。

「さすがにそれはまずいだろ」

「でも、このまま居るのもね」

そのままいい案もなく悪戯に時間を浪費してしまった。そして担任登場。若い英語教師で熱血系。どこにでもいるような先生だ。生徒からの人望がまったくない。いまだき熱血ははやらないということなのだろう。

「はじめるぞ〜って、なんだこの人数は」

三人だけの教室。そりゃ驚く。もう、驚きを通り越して何かになっっている。

「全員サボりで〜す」

葉が言う。

「なんだと!」

本当にこのクラスの奴らはどうなってるんだろうな。

「まあ、仕方ない。お前たちだけでもやるか」

やっぱりね。香奈も予想通りという顔だ。葉は絶望に染まってる。

「じゃあ、はじめるぞ」

三人だけの授業はとても長く感じたのだった。

・
・
・

今日の授業が終わった。午前中だけだったのが幸いだ。

「はあ」

葉が溜息をつく。

「どうした幸せが逃げるぞ」

「うるさい。透は答えられたからいいんだ。俺なんて俺なんて。ああ、来なけりゃよかった。朝起きて今日なんかいいことありそうだから学校へ行こうと思った俺がバカだったよ」

まあ、バカだな。その発想が。

「さすがに三人だけってのはきついわね」

香奈も言う。

「しかしな、うちのクラスの連中そんなに不真面目だったか？」
「不真面目というより担任が嫌いなものよ」
「ああ」

あの担任僕達のクラスでは物凄い評判悪いからな。

「俺も嫌いだな。だから、香奈が――」
「却下」

「まだ何も言ってねえだろ――！」
「言わなくてもわかるわよ」

「おお、以心伝心――！　なら、俺と付き合ってくれ」
「時と場所を選びなさい」

「お前ら、そんなことするより帰るぞ」

二人を伴って学校を出る。どこことなく担任が落ち込んでいたように見えた気がする。まあ、気のせいだろうな。そうだとしても気にしない。

「で、明日はどうするんだ？」
「明日ね――」

明日か。正直に言えば行く気はしないんだよな。どうせ明日も人は来ないだろうしな。

「まあ、明日考えるか」
「そうね」

そんなわけで明日のことは明日考えるとして今日は帰った。

第五話 中華はやっぱり炎でしょ

散々な補習のあと帰宅。今はお昼を少し過ぎたくらいだ。僕が帰ったことを感じてドタドタを足音が近づいてきた。

「お兄ちゃんおかえりー！！」

シルが僕に飛びついてきた。それを受け止めて。

「ただいま」

「お帰りなさい透さん」

「ああおかえりキク」

ホウキを持ったキクがやって来た。掃除でもしていたのだろう。リビングへ行く。トウ力はソファーに座ってテレビを見ていた。

「おかえり」

「ただいま」

トウ力はクールだ。元が冷蔵庫だからだろうか。

「みんな昼は食べたのか？」

「まだー！！　シルはもうおなかぺこぺこー！！」

そうだったこいつら誰も料理できる奴がいなかったな。

「じゃあ、今から作るからまっててくれ」
「はい」

二階の自分の部屋に行って私服に着替える。

「さて、と何がいい？」

「お兄ちゃんの作ってくれたものなら何でも、だってどれもおいしいし」

シルは何気につれしいことを行ってくれる。

「私もシルと同じです。透さんの料理はおいしいですから。特に洋食が」

キクの言うとおり僕は料理の中でも洋食が得意だ。一応他のも出来るけど。

「じゃ、今日は炒飯でも作るかな」

この頃中華してないから。

「えっと確かこのあたりに中華鍋がつと」

先に中華鍋をコンロにのせ火をつけようとして。

「あれ、中華鍋割れてるし。それに火もつかない」

さて、つまりは。

「また増えるってことか」

そついった瞬間光の奔流。目をふさぐ。

目を開けるとそこには二人。赤髪セミロングで赤い長袖にジーパ
ンの長身の女と黒髪、緑のチャイナ服の小柄女が居た。

「お兄ちゃんさっきのって……うわ、また増えてる!!」

光を見てやってきたシルが驚く。

「あゝ、壊れるまで最後まで使ってくれてサンキューな」

赤髪の女が言った。

「最後まで壊れるまで使ってくれてアリガトアル」

チャイナ服の女が言った。

二人ともなんなのか一目瞭然。てか、チャイナ服は明らかに中華
鍋だな。

「さつてと透さつさと名前つけろよ」

赤髪の女がヘッドロックをかけながら言ってくる。

「つて、この状況じゃ無理だはなせ!!」

「おつとわりいわりい」

解放される。

「えつとお前はコンロだよな」

「おつ」

「じゃあ、エミで」

「あたしはエミか。いいな。炎を連想させて」

「次はワタシアル」

アル口調の中華鍋は。

「^{メイリン}美鈴で」

パソコンで見たのがこれだけだったからだ。中華鍋要素ゼロの命名。だって、中国の名前なんてわかんないもん。パソコンで覚えてたのがこれだったからだよ。

「アリガトアル」

さつてと、二人も増えてしまったよ。

「あの、今の騒ぎはつて、あらあら、また増えたんですね。どうも、私キクと申します。元ホウキです」

やって来たキクが自己紹介をする。

「ワタシは元冷蔵庫のトウカ」

トウカはそれだけ言っけリビングへ戻っていった。

「あたしは元コンロのエミだ」

「ワタシ元中華鍋の^{メイリン}美鈴ネ」

さてとこれで自己紹介終了。それにしてもまさか一度に二人も増えるとは思わなかった。てか、この頃一度に壊れすぎな気がするな。大事に使ってたのに。誰かの作為を感じるのは僕だけなのだろうか。

まあ、こうして大切に使った道具を捨てないで一緒に住めるというのは喜べるんだけど。なぜか全員女の子。これは少し勘弁してほしいな。嬉しいけどね。

「さて、コンロがなくなったのでご飯が作れなくなったな」

「おう、それならあたしに任せろ」

エミの手から炎が出る。

「これで大丈夫だろ」

「アイヤ、トオル、今回はワタシに任せるヨロシ。中華なら任せるアル」

「そうか？　じゃあ頼む」

「任された」

エミと美鈴^{メイリン}新人二人組に料理を任せてリビングへ。

「あれ、お兄ちゃんなんで戻ってきたの？　おひるごはんは？」

「あの二人がやってるよ」

「大丈夫なの？」

シルの言いたいことはもつともだ。今まで擬人化した三人は料理が出来なかったからな。まあ、大丈夫だろう。中華鍋だし。今回は信じよう。もしもの時は出前だな。

・
・
・

結果から言えば僕の心配は徒労に終わった。

「すごいな」

「どうアル」

認めよう中華は完璧に負けた。

「僕の負けだな。このチャーハンうまい」

「よかたアル」

「本当だ〜おいしい〜」

シルも食べて言う。

「本当においしですね」

キクも同じく。

「……おいしい」

とまあ、先輩物三人組はご満悦のご様子。しかし、エミだが、火力あがったな。人間になって確実に。

「そうアルかよかったアル」

「お前は中華担当だな」

これで僕の負担が減ることを祈る。

「任せろアル、トオルには世話になったアルからな」

いい子だ。なんかいい子だこの子。

「さて、とりあえずよろしくな」

「よろしくアル」

「よろくな」

今日二人も家族が増えました。

第五話 中華はやっぱり炎でしょ（後書き）

次回更新は二週間後です。

間章 1

「おい、お前ら早くしやがれ」
『はい』

高校生くらいの少年にたくさんの女性がしがっている。

「まったく、お前ら壊されてえのか？」
『めっそもありません』
「それなら気合いいれてやりやがれ」
『はい』
「おぼっちゃま」

部屋に執事が入ってくる。

「どうした？」
「いえ、もう一人の参加者と思える人間を見つけました」
「なんだと！！ 本当か！？」
「まことにございます」
「そうかそうか。で、今すぐ行くのか？」
「いえ、まだ、開始の合図はありません」
「そうか、まだか、なら、こっちはゆっくりと戦力を整えるだけだな」
「そつでございますね」
「さて、またやるか」

壊れたモノの前に少年が立つ。

「オラ、さっさと出てきやがれ！」

モノが黒く輝く。その輝きが収まったときそこには人が居た。

「さあ〜て聞こうかお前のゴシユジンサマは誰でしょう？」

「あなた様でございます」

モノが言う。

「はっはっは、はははははは！！！！ あ〜、楽しくってしかたねえ。早くやりてえな〜」

狂気が渦巻く。

第六話 公園

翌日、補習はなくなった。全員こないことが確定したので担任が連絡してきた。あのときの担任の声が物凄く沈んでいて聞いてて自分の気分まで沈んでできてしまった。まあ、それはいいとして昨日エミと美鈴メイリンがうちの家族となった。人間1に対して元モノが5もはや人間のほうが少ないという異常事態だがまあ、それなりに楽しくなってきた。その分食費が上がってしまっているのだが。

「ふあゝあ」

朝、今日はトウカは来ていない。鍵をかけたのと寝ているときに戻るように教育してみたのだが、成功したようだ。

「さてと起きるかな」

朝起きてキッチンへ行くと既に――。

「あ、あはようアル」

「はやいな美鈴メイリン」

――美鈴メイリンが居た。

「早起きは三文の徳アル」

中華鍋のわりにいろいろ知ってるな美鈴メイリンは。もしかしてそういうのってそのものの歴史とかで変わるのかな。中華って歴史長そうだし。

「そうか」

「さつき鍛錬を終えて水のみに来たヨ」

「鍛錬？ 拳法かなんかか？」

「そうアル」

「そうか」

なんかこの頃武闘派が増えてきたな。

「まあいいか、とりあえず朝食の準備するか」

「手伝うアル」

「ああ、サンキュー」

「なにすればよいか？」

「そうだな。とりあえずエミを起こしてきてくれ」

「アイヤ、わかったアル」

美鈴^{メイリン}が二階に上がっていく。

「さてと、その間に下ごしらえだな」

今日は和食にしよう。味噌汁と魚だな。

・
・
・

「ふあゝあ。つたくよ、休みなのに起こすなよ」

やったきたエミの台詞。サバサバした駄目な姉な感じがする。い
そくだよなこんな大学生。髪ボサボサだし。

「仕事だ。お前に休みはないだろう。新しいコンロというかい
ろ来るまで」

「あゝ、そうだったなゝあゝ面倒くせえ」
「お前なゝ」

「まあ、透を困らすわけにはいかないし飯食えねえのはもっとまずいからな手伝ってやるぜ」

「ああ、だが、その前にその髪を何とかして来い」

「あ？ ああ、いいっていいって」

「お前が良くてもこつちが気にするわ」

「そうか？ ちょっとまってろ」

エミが走っていく。そして戻ってきたときには――。

「これでいいだろう」

――結んできていた。それがまた良く似合っている。

「おっし、じゃあやるか」

「ああ」

そんなわけで調理開始。火力上がっている上に大きさも自由自在になっていた。こいつの能力か。それにしても擬人化したら能力が上がるってどんなファンタジーなんだろう。まあ、それを言ったらこんな状況がファンタジーなんだけど。

・
・
・

「よし出来た」

純和風の朝食。

「ようやくできたな」

エミが言う。

「いや、お前が余計なことをしなければもっと早く終わったよ」
「う！ あ、いや、ほら」

エミが全部一気にやってしまおうと言って火力を間違ひ失敗し全部最初からやり直しになってしまったのだ。

「はあ」

「その……悪かったよ」

「今度はきちんとしてくれ」

「おう、任せろ」

大丈夫なのか？　なんか明日にはというか昼には忘れてる気がする。

すると――。

カンカンカンカーン！！

――鐘を叩くような音が聞こえてきた。

『起きるアルー！！』

どうやら美鈴メイリンがシルたちを起こしてくれているらしい。つまりあの音は中華鍋を叩く音か。

「うわゝー！！」

シルがリビングにやって来た。

「うう、まだ眠いよ」

「はいはい、シル顔でも洗ってきたら目が覚めると思うぞ」

「うん、お兄ちゃん」

シルがリビングを出て行った。入れ違いでキクが入ってくる。

「おはようございます。透さん」

「おはようキク」

キクはシルと違いしっかりと整えてきていた。

「お手伝いしましょうか？」

キクが言う。

「それならこれ運んでくれ」

出来た料理を渡す。

「はい」

「おにちゃん！」

どうやら顔を洗って目が覚めたシルがやって来た。

「おっはよう」

「おはよう、シル」

「あれ、トウカお姉ちゃんまだおきてきてないの？」

シルから見てトウカは姉なわけか。ってまあ、一番年下っぽいかな。

「ああ、まだトウカは寝てるだろう」

低血圧なんだろうな。冷蔵庫だから。まあ、美鈴メイリンが起こしに行つたからそろそろ来る頃だろう。

「起こして来たアル」

「ああ、ありがと」

「イイアル」

遅れてトウカが入ってきた。

「おはようトウカ」

「あはよう」

それだけ言つてトウカはソファに座った。

「さて、食べるか」

『いただきます！！』

みんな食べ始める。

「シル魚もらうぜ！！」

「あー！！勝手に取らないでよー！！」

エミとシルの魚の取り合い。

「こらこら一人一匹だ」

「足りねえな」

「それなら米を食え」

「おおその手があったか」

エミが手をポンツと叩き茶碗を差し出してくる。

「はいはい」

「エミさん、透さんにそんなこと」

「いいよ、キク」

「そう、ですか」

「ほら、他にほしい奴いるか？」

「なら、お願いするアル」

「わかった」

美鈴メイリンの茶碗を受け取ってご飯をつぐ。

「ほらよ」

エミには大盛りにしてわたす。

「サンキュー」

「ほら。美鈴メイリン」

「ありがとアル」

ああ、家のエンゲル係数が格段に上昇しそうだな。

そして食後。

「さて、これからどうしようか」

学校があるときは休みがいいと言つがいざ休みになったらでやることがないのである。

「それなら外に行こうよ!!」

シルが提案する。

「そうだな。まだ、外に出たことねえからな」

エミが言つ。

「ワタシもアル」

メイリン
美鈴も言つ。

「外か」

外に出れば誰かに見つかる可能性があるがみんな出たいようだな。

「そうだな。じゃあ、行くか」

「やった!!」

みんなそれぞれ喜んでいる。

「そうだな少し遠くの公園にでも行くか」

弁当を持っていけば昼の心配はないし。近場を選ばなかったのは知り合いに遭遇するのを防ぐため。

「わーい!!」

「では、準備しないと」

「準備ね」

「おっしとりあえずなに持っていく?」

「まずは昼の弁当アル」

どうやらみんな楽しんでくれそうだ。それから急いで準備して出発。帰ってきたときにまた一人増えていないことを祈る。

・
・
・

さて、家を出て早々僕は後悔していた。今日がたとえ夏休みの平日とはいえ通りには人がいないわけではない。よく言えば個性的な悪くいえば変な集団だ。目立つのだ。それに美少女(?)なのも理由と思われる。そしてそんな集団の中心の僕にいやおうなく視線が集まる。

「はあ」

「どうしたのお兄ちゃん?」

隣を歩くシルが聞く。こいつらは視線なんぞつゆ知らずだ。

「いや、なんでもない」

こいつらにこんなことを言ってもしかたない。

「そう?」

「どこか気分が悪いのなら言ってください」

キクが言う。

「大丈夫だ」

そう言って歩き続けた。

・
・
・

「ついた」

家から歩いて一時間のところにある緑の芝生が綺麗な広い公園だ。
僕たち以外誰もいない。

「広い!!」

シルが飛び跳ねながら言う。

「確かに、結構広いじゃねえか。それに日差しが気持ちいいし」

エミが言う。木陰にいる僕でも日差しはきついというのにエミは
余裕そうに言った。なんたって昼ごろだ。一番きつい時間だ。エミ
がそついえるのは元コンロだったからか。

「それなら美鈴も——って美鈴!!!」

美鈴はぐったりと木陰で倒れていた。

「大丈夫か!!」

「うっ、暑いアル」

ただ暑くて倒れただけかよ。

「てか、お前中華鍋だろ。なんで暑さに弱いんだよ」

「うっ、鍋だとしても暑さ強い限らないアル」

素材的に熱伝導性がよいからなのかどうやら美鈴メイリンは暑さに弱いらしいっぽい。うっん、すぐに熱しやすい性質だからか？

「トウカとりあえず氷だしてくれるか？」

「……………はい」

トウカが氷を出してくれた。

「ほら、美鈴メイリン」

「うっ、ありがとアル」

美鈴メイリンは暑さに弱いのか覚えておこう。何かあったとき用のために。って何があるかわからないが。

「さて、来て早々だが、昼にするか」

時間もちょうどいい。一人ダウンしてるがそのうち復活するだろう。ちょうどいい木陰もあるし。そこに持ってきていたシートを引く。

「さて、食べるぞ」

全員で座って弁当を囲む。

『いただきます！！』

全員が食べ始めた。

第七話 遊んでみたらいろいろわかる

シルが玉子焼きを食べる。

「うーん、やっぱりお兄ちゃんの料理おいひいねー！」

「こら、シル食べながらしゃべるな」

「えへ、ごめんなさーい」

「よし、もうするなよ」

こういうのって妹を持つ兄の気分だよな。まあ、実際の妹はそうはいかないのだが。

「透さんはどこで料理を覚えたんですか？」

キクが聞いてきた。

「あー、うちはさ、両親が仕事ばっかでほとんど家にいなくて全然と覚えたんだよ」

「そうなんですか」

キクが少し申し訳なさそうな顔をする。

「別にそのことについてお前が何か思ってもしかたないし。そのことには納得している。今はお前達がいるだろ？」

「そうですね。そうです」

そっぴい微笑むキク。いい奴だな。

ヒョイ、パクッ、ヒョイ、パクッ

その隣で無言で食べまくるトウカ。

「トウカももう少し落ち着いて食べよ」
「……………」

何も言わず食い続ける。トウカは表情が変化しないので何を考えているのか読みにくい。せめて感想くらいは言ってほしい。仕方ない聞いてみるか。

「おいしいか？」
「……………」

小さく頷いた。よかった、おいしかったようだ。

「それはよかった」
「……………」

また頷いた。そして黙って食べ続ける。

「それはあたしがもらっぜ!!」
「アイヤ！ 渡さないアルヨ!!」

エミと美鈴メイリンが弁当の取り合いをしていた。

「喧嘩するなよ」
「いや、これはあたしが咲きに取ったんだ」
「ワタシアル」
「おいおい」

そのままこう着状態が続くかと思われたが――。

「じゃあ、わたしが食べる」

シルがやってきてそれを食べてしまった。しかもそれが最後の一個だったようだ。

「……………」

「……………」

「頼む、そんな泣きそうな顔で僕を見ないでくれ」

「……………」

「……………」

ああ、こういう顔に弱いんです。てか、泣きそうな顔ってのは卑怯だよ。それにキクの視線が痛い。

「また今度好きな作ってきてやるから、な」

「なら、あたしはトンカツかな」

「アタシは玉子焼きアル」

……………一瞬で喜び顔に変わる二人。げんきな奴らだ。

・
・
・

そしてデザートまで食べ終わった。

「ふう、ごちそうさまー!!」

「ごちそうさまです。透さん」

「……………」

「しっさまー!!」

「こちそうさまアル」

「ああ、お粗末さまでした」

みんな気持ちよく食べてくれたな。

「よし、遊ぶぞー！！」

シルが走っていった。

「元気な奴だな」

「おっしあたしも行くかね」

「ちよつとクルアル。勝負するアル」

「お、いいなやろうぜ」

物騒な二人が木陰から出て行った。大丈夫か？ まあ、何とかなるだろう。

スクツとトウカが立ち上がった。

「トウカは何をするんだ？」

「……………これ」

巨大な氷塊を取り出したトウカ。

「何をする気だよ」

こんな真昼間の公園で氷塊なんか取り出して何をする気なんだよ。

「……………」

さらに氷のノミとハンマーを取り出す。

「……………まさか、彫刻でもやるきか？」

「……………」

コクリと頷くトウカ。

「そ、そうか」

ま、まあ趣味は人それぞれだし。いや、まあ、トウカたちは元道具で人ですらなかったわけだが。まあ、いいか。

「じゃあ、がんばれよ」

「……………」

再び頷いてトウカは彫り始めた。

「皆さん元気ですね」

「キクは行かないのか？」

「私まで行くことはないでしょう」

「そうか？」

「そうですよ。それにここで見ていたほうが面白いですし」

公園を見渡す。走り回るシルに戦っているエミと美鈴^{メイリン}、氷の彫刻をしているトウカ。

「確かにな」

見ているだけで楽しいな。こんなのこいつらが出てこなかったら味わえなかったな。

「おにいちゃん!!」

シルが呼んでいる。

「さてと行くかな」

立ち上がる。

「ほら、行くぞ」

「私もですか!」

「当たり前だろ」

キクの手をとり立たせる。

「さあ、行くぞ」

シルの元へとキクを引き連れて走っていく。

そのあとは日が暮れるまで遊んでいた。

第八話 洗濯ばさみ現る

翌日、キクと共に洗濯物を干していた。キクは、掃除洗濯など物や場所を綺麗にすることに關しては右に出るものがない。擬人の二名さんは得意分野がはつきりしている。元がモノだからだと思う。ま、それが何かはそのときにならないとわからないんだけどな。

「キク、洗濯ばさみとってくれ」
「はい」

キクが洗濯ばさみを差し出す。

「ありがとう」

それを受け取り洗濯物につけようとした瞬間――。

バキィ

――持つところ（？）が折れた。

「……………」

はい、もうみなさんお分かりのお約束。

刹那洗濯ばさみが光り輝いた。咄嗟に洗濯ばさみを離す。

現れてのは茶髪をツインテールにした少女が居た。

「最後まで使ってくれてありがとうございます」

少女はそう言った。

「えーっと一応聞くけど洗濯ばさみ？」

「はいです」

「そうか」

やはりまた一人増えてしまったようだ。

「それで、名前をくださいです」

「ああ、そうだな」

何がいいだろうか。洗濯ばさみだから……………。

「よしじゃあ、サクミだ」

「サクミですか。どこかい加減な感じがするですがまあ、いいです」

「うぐっ！」

確かに安直過ぎたか。まあ、気に入ってくれたならいいだろう。

「じゃあ、みんなに紹介するか。サクミ、まず僕の隣にいるのが元ホウキのキクだ」

「よろしくお願いします」

「よろしくです」

「じゃあ、他の連中に紹介するから行こう。キク、悪いけどあとは頼んだ」

「はい。わかっています。あとは任せてどうぞ」

洗濯物干しをキクに任せて家の中へ。

「あゝお兄ちゃん。洗濯終わ——あれ？ その子だれ？」
「今紹介するよ。シル」
「うん」

頷くシル。

「この子は元洗濯ばさみのサクミだ」
「またー！！」
「サクミですよろしくです」
「うう。よろしく」

さて次だな。キッチンに向かう。エミと美鈴メイリンがいた。

「アレ、透どうしたアル？」
「どうしたんだ？」
「ちよっと新人を紹介しようと思ってな」
「アイヤ、後輩アルカ？ うれしいアル」

美鈴メイリンは嬉しそうだ。

「パシリには使えそうか？」

エミが言う。パシリにする気なのかよ。

「やめろよそんなこと」
「冗談だよ」

本当にやりそうなんだよ。

「まあ、とりあえずサクミ——あれ？」

……………サクミはキッチンに入って来てなかった。

「おい、サクミ！」

呼ぶと、サクミは顔を出した。顔だけ。

「なにやってんだサクミ？ こっちこいよ」

「危険な感じがするです」

「……………」

「ん？ どうした？」

視線がエミに集まる。わかる気がするな。さっきの発言を聞いた限りでは。

「特にそっちの赤毛からは危険な匂いしかしないです」

「しかし、そこにいたら紹介できないし。出て来いよ。大丈夫だよ」
「いやです」

即答された。

「どうするかな」

「透さん。任せるアル。伊達に長生きしてないアルヨ。子供の扱いとても得意ネ」

そういった美鈴^{メイリン}はチャイナ服の袖からアメを取り出した。何でそんなの持ってるんだよ。

「！-！」

サクミがじっと見つめている。

「もっとあるアル」

もうひとつアメを取り出す美鈴。メイリン

「あつ」

サクミがほしそうな顔をしてじっとアメを見つめる。行こうか行かないか迷っているみたいだ。

「まだあるヨ。アメが嫌ならチョコもあるアル」

アメとチョコが出てくる。一体何個持ってるんだ。

ゆっくりとサクミが出てきて美鈴メイリンに向かう。

「はい、どうぞアル」

「……………もきゅもきゅ」

もきゅもきゅ食べ始めた。

「どうアルか？」

「……………おいしい」

「それはよかったアル」

「……………ありがとうございます。いい人です」

餌付けされてるぞサクミ。

「ワタシ、美鈴メイリンアルよろしくアル」

「サクミです。よろしくです」

これで美鈴メイリンとは打ち解けたなあとは問題のエミだ。

「おう、お前が新入りか」

エミが近づいていくがサクミは美鈴メイリンの後ろに隠れる。

「あゝ」

頭をかきながらどうしようか考えるエミ。

「よし」

お、何か思いついたみたいだ。

「コイツがどうなってもいいならそのままでもいいが」

エミが僕を抑える。

「おい！」

「いいからいいから」

「よくねえよ！ もっと酷いことになるよ！」

「まあ、いいって」

サクミを見ると。

「ひ、人でなしです。あ……………どの道人ではなかったんですね。これはみんな人でなしです」

変な納得をしていた。

「つと、そういうことじゃないです。早く透さんを離すです」
「あゝ、離す離す。だからそっちも出てきてくれよ」
「わかりましたです」

サクミが前に出る。

「悪かったな透」
「いや、いいがどうするんだ？」
「ん？ こうする」

取り出したのはお菓子詰め合わせ。

「お前もかよ」
「いい人です」

お前もお前だ。サクミ餌付けされるな。

「はあゝ。まあいいか」

本人たちが納得してるんなら。

「さて、あとはトウ力だけだが、今どこにいるんだ？」
「ここ」
「うわー!!」

いきなり後ろから声をかけられて驚く。

「お前どこにいたんだよ」

「……ずっとここにいた」

「そ、そう？」

気がつかなかった。

「……………」

トウカがサクミを見る。

「……………トウカ」

「え？ あ、はい、サクミです」

名前だけ言ってトウカはさっさとソファ―に座ってテレビを見始めた。もう、何も話を聞く気はないらしい。

「おかしな人ですね」

「言っなよ」

それだけは言ってはいけない。

「まあでも、ここの人たちは楽しそうです。いい人も多いし」
「そうだな」

お前の判断基準はおかしい、そういいたかったがいえなかった。

第九話 子供のけんかを侮るなかれ

さて、サクミが来てみんなに自己紹介したら昼を食べるには丁度いい時間になった。

「さて、とじゃあ、昼だがサクミの歓迎会兼ねてちょっと本気出して作るかな」

「やつほ～です」

「やった～！」

上がサクミ、下がシル。

「わたしはカレーが食べたいです」

「え～！ わたしハンバーグがいい！」

サクミとシルが言い争いはじめる。

「何を言うんですか！ 今日わたし歓迎会ですよ！」

「食べたいものは食べたいんだもん！！」

「駄目です」

「なんで～！！」

シルとサクミの言い争いは続く。

「駄目ったらだめです～！！」

「だからどうしてよー！！！！」

「どうしてもですー！！」

「う～、わたしよりも身長低いくせにー！！」

「年下の分際で何を言いますか！！ わたしの方が1mm大きいで

す！！」

「1mmだけじゃん！！」

「1mmの差は大きいです。1mmを笑うものは1mmに泣くです！！」

本当に子供のけんかだな。見ていてほえましい。そういえば喉が渴いたな水でも飲もう。

「わたしの方が胸大きいもん！！」
「ブツ！！」

シルの一言で思わず水を吹いてしまった。

「な！？　なななななな！！」

顔が真っ赤なサクミ。思えば元シャーペンのシルは僕と一緒に授業に出ていた。というか使っていた。だからだろうか、シルにはそっち方面の知識がある。

「あんなことやこんなことも知ってるもんね！！」
「あう、あう、あう」

対してサクミは元洗濯ばさみ当然そっち方面の知識は皆無。

「そ、そそそそそれで、でもでも、む、胸の大きさはか、関係ないです！！」

茹蛸のような顔で言うサクミ。ここで嫌な予感がした。とりあえず逃げる準備をしておく。

「じゃあ、お兄ちゃんに聞いてみようよ!」

ダッ!!

その言葉を聞いた瞬間逃げ出した。

「あ、まってよー!!」

待てと言われて待つバカはいない。ちょうどリビングにキクが入ってきた。

「キク!!」

「はい!」

「あとは頼んだ」

「あちよつと」

それだけ言っでキクの脇をすり抜け自分の部屋へと駆け込んだ。

「ふう」

あのまま逃げなければどうなっていたことか。まあ、普通の男にとつてはいい展開(?)になっただろうが。僕はごめんだ。他人の目もあつたし。とりあえずシルにはあとでお礼しよう。その必要はないかもしれないけど。それにしてもシルとサクミには困ったな。

「とりあえず二人のリクエストどうするかな」

もう、ハンバーグカレーみたいなのもいいかな? ふと耳をすましてみると。キクの声が聞こえた。おそらくシルとサクミのお説教だろう。

コンコン！！

ノックの音と共にエミが入ってきた。

「おう、さっきは災難だったな」

「エミなにか用か？」

「ああ、もう少し説教には時間がかかるらしいからそれを伝えに来た」

「わざわざ悪いな」

「いってことよ。まあ、礼がしたいなら一品何か追加してくれ」

「はいはい」

ちゃっかりしてる。

「じゃあ、伝えたからなー！！」

エミは部屋を出て行った。扉が開いたときキクのガミガミ言う声が聞こえた。

「キクは怒らせないようにしよう」

そう心にかたく誓ったのだった。怒られなくはないからな。

「さーてと、どうやって時間を潰すかな」

といってもそんなに時間はかからないだろう。読書は集中しすぎるといつの間にか夜になってたりするからな。

「そうだな、ラジオでも聞いてよう」

部屋の中にはテレビはないので棚の上のラジオをとる。結構古いものだが修理しながら使い続けてきた。元は僕の叔父が使っていたものらしい。

カチッ

「……………あれ？」

スイッチを入れるが何も起きない。

「おかしいなこれでどうだ」

カチカチカリ、シューン

「あゝついに壊れたか」

どうやらこのラジオはその役目を終えたようだった。つまり。ラジオをベッドの上におく。その瞬間ラジオが光輝く。

「やっぱりか」

さすがになれたので取り乱しはしない。光が収まると大きなゴーグルをつけた白髪をポニーテールにした少女が座っていた。

第十話 ラジオ現る

また、今度はすごいのが出てきたな。ゴーグルが顔のほとんどを覆っていてその表情はまったくわからない。ちなみにゴーグルはある。術の。書。録に出てくるクローンの御。妹のかけているアレの真っ白バージョンだ。よく似ている。

「……………最後まで……………ありがとう」

澄んだ小さな声でそういった。

「あ、ああ」

「……………」

「えっと、名前だよな」

なんにしようかな。

「そうだなお前はティーだ」

正直なんとなくだ。

「……………了承した。マイマスター」

「それで少し聞きたいんだけどそのゴーグルは何のためにしてるんだ？」

「……………目隠し」

「目隠し？」

何で目隠しする必要があるんだよ。それじゃあそのゴーグル役に立たないか？ そう聞こうと声を出そうとすると。

「目が見えないから」

とティーは言った。僕は声になんて出していない。心でも読めるのか？

コクリ

ティーが頷いた。

「……それって能力か？」

再び頷くと――。

「……ラジオだから受信して……聞かせるのが仕事……だから」
「そうか」

やはりモノたちは擬人化すると能力が上がるようだ。まあ、あまり人に害はなさそうなので気にしないでおこう。

「なあ、顔見せてもらってもいいか？」

盲目なのには驚いたが口元とかで判断するに結構可愛いと思う。
一度はみておきたい。

「……それは命令？」

「命令じゃないよ。お願いだよ」

「………了承」

ゴーグルに手をかけるティー。そしてそれはずした。

「……………」

この三点リーダーは僕。ゴーグルを取りあらわになった淡い紅色の瞳が僕を見つめる。全体を見たティーの顔はどこか儚げな美しさがあった。純粹に綺麗だと思った。

「……………」どこか変？」

「いや、変じゃないよ。綺麗だと思うよ」

「……………」そう……………」もう、戻していい？」

「ああ」

ティーがゴーグルを元に戻そうとする。少し名残惜しいというか残念だな。

「……………」ゴーグルはないほうがいい？」

「そうだな。ないほうがいいかもな」

盲目だけど見た目じゃわからないし。

「……………」そう」

ティーは戻しかけたゴーグルを首にかける。重くないのだろうか。

「……………」いい？」

「ああ」

でも、やっぱり顔は見えてたほうがいいな。

「……………」そう」

表情は変わらないが喜んでいるのがわかる。

「おう、透終わったみたいだぜ！」

エミ再び登場。お説教は終わったようだな。

「あと、時間がなかったから昼は美鈴メイリンが作ったぜ」
「ああ、悪いな」

そこでエミがティーに気がついた。

「お！ また新入りじゃねえか」

「ああ、ティーっていうんだ」

「そっかそっか、あたしはエミだよろしくな」

「……………よろしく」

「それにしてもけつたいなゴーグル持ってんだな。なんだそりゃ？」

なんと答える気だろうか。もう、目隠しとは言えないし。てかさ
つきまでの目隠しでよかったのか？

「……………趣味」

趣味にしたようだ。

「へーいい趣味してんじゃん」

「……………そう」

「さてとじゃあ、下行くか」

下に降りる。中華のいいにおいがする。

「……………いいにおい」

ティーは視覚がない代わりに他の感覚が強いからよくわかるだろう。

「アイヤー。透さん悪いけど昼は作ってしまったアルヨ」

「ああ、いいよ。正直な話助かる」

「そう言ってくれると嬉しいアル。そっちの子は新入りアルか？」

「ああ、ティーだ」

「ワタシ^{メイリン}美鈴ネ。ヨロシクアル」

「……………よろしく」

リビングに入るとソファアの上でシルとサクミが落ち込んでいた。

「大丈夫か二人とも？」

「あううあ、キクおねえちゃんが怖いよ」

「お、怒らせないようにします」

キクに色々トラウマを植えつけられたみたいだな。

「まあいい。ほら二人共新入りのティーだ」

「……………よろしく」

「よろしく、あゝまた増えてるよ」

「またですか！！ わたしが出てきたあとにすぐですか！！」

「歓迎してあげろよ！！」

「冗談です」

「そうか？」

「そうです」

うーん、大丈夫か？ 冗談にまったく聞こえなかったぞ。

トウカがリビングに入ってきた。

「知らない子がいる。どこからさらってきたの？」

「さらってないー！」

「じゃあ、誰？」

「元ラジオのティーだよ」

「そう、ワタシは元冷蔵庫のトウカ。よろしく」

「……………よろしく」

そのままトウカはソファへ。

「あらあら、またにぎやかになりましたね」

「ああ、キク。何か機嫌がよさそうだね」

「ええ、うふふ」

ああ、ストレスたまってたのかな。

「と、とりあえず食事にしよう」

「そうですね」

サクミとティーを加えさらににぎやかになった食卓で昼食を食べた。

間章二

そこにはたくさんの人がいた。

「なあ、じい」

「なんでございましょうおぼっちゃま」

執事に少年が聞く。

「俺の足りないものはなんだと思う？」

「わたくし私めにはわかりませぬ」

「そうか。まあいい、それであの件はどうなった？」

執事が書類を出す。

「はい、現在の状況を報告書にまとめました」

「見せる」

「どうぞ」

執事が少年に書類を渡す。その書類には望月透について書かれていた。

「近辺にはモノが張り付いています。それはこちらに」

違う書類を少年に渡す執事。

「はっ！ シャーペンにホウキに冷蔵庫、洗濯ばさみにラジオ、コンロに中華鍋、これはお笑いだあははははは！！」

大声で笑い出す少年。

「さようですね。我々のモノと違い戦闘用ではありません」
「そうだな、何より俺とは権力がちげえよ！」

書類を投げ捨てる少年。

「ああ、始まるのが楽しみだ」
「そうでございますね」

何かが始まるのはまだまだ先。

第十一話 掃除中にアルバムとかが見つけると大抵酷い目に遭う

「おゝい、シル、その奴とつてくれゝ」

「はゝい」

シルが取って来たはたきで棚の上の埃を落とす。今僕達は物置の
そうじと整理を行うことにし実行していたのだ。

「久しぶりだからかなり汚いな」

本当なら頻繁に掃除したいのだが自業自得というか何というか、
僕の癖のせいで物が多すぎて時間があるときしか出来ないのだ。で
も、人手いやモノ手が増えたから出来るかもしれないな。

「よし、とりあえず中にあるものだしてくぞゝ！」

物置の入り口近くにある物から外に出していき庭に敷いたシート
の上に置いていく。いろんな物がある。

「これは掃除のしがいがありますね」

キクが目を輝かせながら言う。やはり掃除道具、掃除をするのは
楽しいようだ。

「おっ！ アルバムアル。アルバムをミツケタルよー！」

メイリン
美鈴が大声で言う。ちょっと待てー！！

「わ、こら待てー！！」

だが、時既に遅く。エミがさっさと来てそれも見てしまった。他の奴らも続々と集まって来るし。

「へー、アルバムね。おっ！ 透の小せい頃の写真めっけ」

「本当！ エミお姉ちゃんわたしにも見せて！」

「見せることを要求するですー！」

アルバムにシルとサクミが群がっている。持ってるのがエミだから身長差で見れないのだ。やめて欲しいな。

「ほらよ」

エミがシルとサクミにアルバムを見せる。止めようとしたがティーに掴まれて止められなかった。ティーを振りほどくのは僕には無理だ。力とかじゃなくて精神的に。

「「おお」」

何だよ。何見てるんだよ。

「可愛いー！ ちっちゃいお兄ちゃん可愛いー」

シルの一言が僕の心に突き刺さる。そして思い出される忌まわしき過去。

「女の子の格好してるです。可愛いです」

「昔の日本では体の弱い子に女の子の格好をさせたと聞いたことがあるアル」

そう、僕は昔両親のせいで女の子の格好をさせられていた。何故かは不明だが途中からは楽しくてやっていたらしい。それを聞いたときは初めて殺意が湧いた。

「ほら、遊んでないで掃除しましょう」

「おう、キク見て見ろよ」

エミがキクにまでアルバムを見せる。

「何です？——あらあら、本当に可愛いですね」

……。羞恥心で死にそうだ。死因羞恥心。笑えないな。

「そうだ、実際に見て見ようぜ」

エミが言い出した。

「ちょっとまって！？ 何を言い出す！！」

「良いね！」

僕の気持ちなど全くわからないシルが賛成する。

「まて、僕——むがつ！！」

ティーに口を塞がれた。言っておくが別に何もやましくないからな。期待するなよ。手で塞がれたんだ。頭一つ分以上小さいティーは縁側に乗って僕の口を塞いでいた。

「んーんー！！」

「ナイスだティー！！」

全くナイスじゃない！！

「んーんー（離してくれ）」

「……見てみたい」

僕に味方はいないのか。願いを込めてキクと美鈴^{メイリン}を見るが――。

「ごめんなさい透さん。私も見てみたいんです」
「ワタシモアル」

常識人ばい二人もダメだった。ならトウ力は。

「どっちかと言われたら見てみたい」

完全にアウエーだ。なんとか抵抗しようとするのだが。全員に押さえられた。だが、女装道具はないはず。

「エミお姉ちゃん。かつら見つけたよ！！」

シルが余計な物を見つけ出したきた。

「服は私かキクのでいいな」

「そうですね。化粧品もありますし」

マジでやばくないか。ちょっと考え直せみんな。ティーは心を読めるはすだが全く聞いてくれない。

「じゃあ脱がせるアル」
「行くよ」

トウカと美鈴メイリンが服を脱がしにかかる。口を塞がれたさらにエミヤ
キクに体を押さえられた僕に抵抗する事は出来なかった。

・
・
・

「こ、これは!？」

顔を真っ赤にして驚くキク。

「凄いよお兄ちゃん」

僕を誉めるシル。

「驚き」

珍しく驚いているトウカ。

「すごいアルネ。人は見かけによらないアル」

どこかズレながら驚く美鈴メイリン。

「ヤバいな。とりあえず写真だ写真」

カメラを探すエミ。やめてくれ。

「……………可愛い」

見えてないティーはペタペタ体を触ってから言った。

「なんか負けたような気がする」

サクミが呟く。

「うう……」

キクたちの目の前には薄手の黒の長袖にジーンズを着た。腰まである黒髪の美少女が涙目でへたり込んでいた。……

……僕だった。

「……うう、酷い」

恨みを込めてキクたちを見る。

「し、シャレにならないですね」

「ち、ちよつとふざけすぎたか」

キクとエミが僕を見ながら言う。正直自分のこんな姿なんか見たくない。

「お兄ちゃん可愛いよ。自信持っていよ!!」

「シル、これならお姉ちゃんですよ」

「それもそうだね」

そうだねじゃないよ。自信なんて持ちたくないよ。そしてサクミ誰が姉やねん。

「うう」

もう、泣きたくなってきた。

「可愛いアルネ」

「可愛い」

美鈴メイリンとトウカそれ以上言わないでくれよ。死にたくなる。

「うう、もう、いいか？」

「んゝよし、じゃあ、行くか」

エミが笑顔で言う。

「ちよつとまで、どこに行く気だ!!」

「ふっふっふ、外へだ!!」

「ちよつ!! やめろ!!」

無理矢理外へと連れ出された。掃除するんじゃないのかよと言っ暇はなかった。

第十二話 バレないことを喜んでいいのかわからない

「……………うう」

絶賛僕は今泣きそうです。今の状況は……言いたくはないけど女装して商店街を歩いています。ちゃんとシルたちもいますよ。

「大丈夫だよ。お姉ちゃん。誰にもわからないって」

シルが言うが僕にはそんなこと信じられないんだよ。さすがに同級生にはバレると思う。

「バレないバレない」

シルはそう言うがまったくそう思えない。

「大丈夫ですよ。可愛らしいですから」

キクが言う。やめてくれ可愛らしいなんていわないでくれよ。

「死にたい」

「大丈夫、可愛いから」

「トウカもかよ」

泣きたい。でも泣いたら目立つ。目だつたらばれる。板ばさみだ。もういや帰りたい。だが、エミがかえることを許してはくれない。

「とりあえずワタシは周り見てるアル誰か来たら言うアルヨ」

メイリン
「美鈴……」

味方が、味方がいたよ。

「でも、トオルの級友どんなのか知らないネ」

意味ないじゃん。美鈴メイリン僕の感謝の気持ちを返してくれ。

「はあ〜」

「ほらほら、そんなに落ち込まない。留守番のティーのためにもんばらないとな」

ティーは留守番だ。盲目なのはあまり関係ないがあまり外に出したくないからというのが理由。危なっかしいから。といっても他人を心配する余裕はない。自分だとばれないようにするので一杯一杯だ。ん？ まてよ、そいうやあ、学校の奴ってこいつらのこと知らないじゃん。なんだ心配して損した。

「よう透！！」

「！？」

振り返るとそこには佳山葉がいた。つてばれた！？

「あれ、違った女だったって美人だ！！ いや美人と美少女と美少女だ！！！」

あ、ばれてなかった良かったって誰が美人やねん！！ こいつ今度あつたら覚えてろよ。

「なんですか？」

声を変えて葉に言う。

「いや、友達に雰囲気似てたから間違えちゃって」

僕の雰囲気そんなにわかりやすいのか？

「そうなんですか？」

「そうなんですよ。不思議と、でも、こんな美人とあんなバカを間違えるなんて俺どうかしてましたよ」

こいつ今度会ったら殺す。てか、気持ち悪い。なんで口調変わってんだよ。

「（なあ、こいつ知り合いか？）」

エミが小声で聞いてきた。

「（ああ）」

小声で返す。その時失敗を悟った。エミがにやりと笑ったからだ。

「なあ、あたしはこいつの友達でエミってんだがコイツに似てるって友達ってどんな奴なんだ？」

僕を指しながらエミが葉に聞く。

「えっと望月透って言うんですよ。そいつ」
「ちょ！？」

エミやってくれたなこいつ。エミを睨むが知らぬ顔だ。その間も

葉は語っていく。

「まあ、一言で言うと変や奴ですかね。俺は長い付き合いだけど」

ほう、こいつ僕のことをそんな風に思ってたのか。また罪が増えたな。葉、覚悟しておけよ。とそんな僕の殺気に気づかずに葉は話していく。

「変な奴ね」

エミが相槌を打つ。お前何を考えている。

「はい、変な奴ですよ。だっていつまで経っても古くなった物捨てないし。壊れても修理して使うし。どこからか壊れたものとか拾ってくるし」

「へ」

おい、シルなんだその妙に納得な顔は。って、全員かよ。

「他にはどんな感じ?」

シルが催促する。

「今教えて上げるからね」

コイツマジで殺してやろうか。本日何回目かの殺意を抱きながら拷問に耐える。

「でもさ、いい奴と俺は思っただよ。だから、俺はアイツの友達なんだ」

「そうなんですか」

少しは軽くしてやるかな。

「まあ、他にも——」

その後散々人の悪口いつて帰って行った。訂正だからならず殺してやる。

第十三話 掃除の続き

女装で街を歩くという拷問を終えて帰宅。一時間くらいでそんなに時間はかかってないのに掃除の続きをする。女装道具は捨てた。もう二度と女装などしてたまるか。

その時その女装道具をティーが回収していたことなどこの時の僕は知る由もなかった。

「さて、続きやるぞ」

「おー！」

そんなわけで掃除の続きだ。引き続き物置の中にあるものを出していく。日に当たっても大丈夫なものはそのまま天日にさらし、駄目なものは家の中へ。二時間後ようやく全てのものが物置から出た。

「へー物置の中ってこうなってたんだなすっかり忘れてた」

「お兄ちゃんすっかりって忘れてたって」

「ああ、すっかり忘れてた」

あれ、シルなんか呆れてないか？

「何年掃除してないんです？」

サクミが聞いてきた。えっと、確か最後にしたのが あのあとだから……。

「五年位前かな」

「ドン引きです」

ちょ、それ酷い!!　　ってそれなんかのパクリじゃないか?　　駄目だ思い出せない。

「うわあああ!!」

その時悲鳴が聞こえた。美鈴メイリンのようだどうしたんだ?

「Gアル!!　　Gが出たアル!!」

ああ、Gね。わからない人はいないと思うが一応言っておこう。キブリのことだ。

「任せろ!!」

どうやらエミが退治するようだ。

モクモク

あれ何か煙たいって!!

「エミ、こんなところでバ。サン炊くな!!」

「うゝわゝ!!」

「しみるです」

急いで物置の外にでて避難する。

「なにしとんだお前は!!」

「わりいわりい。まさか一気に十個使ったらこんなことになるとは思わなくてな」

「おいおい」

やばいんじゃないかこれ。なんか軽く火事が起きたみたいになってですけど。

「あつはっはっやりすぎたか」

「笑い事じゃないですよ！！ どうしてくれんです！！」

サクミが洗濯物をさす。うわ、本当だ大変なことになってる。洗い直しかゝはあゝ。

「だから、悪かったって」

エミは謝るがサクミはかんかんだ。

「サクミ、エミも悪気があったわけじゃないんだ許してやってくれ」
「むゝ、わかりましたです。でも、次はないです」

これでこつちの方はいいな。

「次はこの野次馬を何とかしないと」

いつの間にかご近所さんが集まってきていた。

「あうう、いっぱい来てるよ」

その後何とか事情を説明し事なきを得た。まあ、嬉しい誤算としてはバ。サンのおかげで虫がいつさいでてこないことか。

「じゃあ、私ははわきますね」

「ああ、キク頼んだ」

物置内のホウキ掛けをキクに任せ僕は中であつた物の整理をすることに。

「……………」

「ティー何をしてるんだ？」

確認しようと物の置いてある場所に行くとティーが狸の置物を抱えて座っていた。

「気に入ったのか？」

コクリと頷くティー。

「なら、やるよ」

「……………いいの？」

「ああ、その代わり大切にやってくれよ」

再び頷いてティーは自分の部屋に置きに行った。

「さて、整理するかな」

いろんなものがあつた。本当に自分が持っていたものかわからないようなものである。

「小学校の教科書か」

さすがにもう使わないし使う機会もない。時には捨てることも必要だ。これからは特にな。

「捨てるかりサイクルだな。……………ごめんな」

束ねて紐でくくる。そして脇に丁寧に置く。

「さて、次だ」

中学の教科書。

「これもだな」

同じように紐でくくって脇に置く。

「おっ！ 皿発見」

いったいいつ買ったのかわからないが綺麗な皿が箱に入っていた。
であった。

「美鈴メイリンいるか？」

「何アルカ？」

「これを台所に持って行ってくれるか。一人で持ちきれないなら他の奴にも頼むけど」

「大丈夫アル」

両手で箱を持ちさらに器用に頭でも持っている。物凄い心配なんだが。

「気をつけてくれよ」

「わかったアル」

台所へ向かう美鈴^{メイリン}。思わず耳をすませる。

「さてと」

他には何があるかな。五年前にも一度整理はしたのだけどどうやらあまり意味はなかったようだ。五年前だからよく覚えていない。

第十四話 古き電灯

「ふう、こんなもんか？」

いるものといらないものを振りわけして整理した。と言っても――

「あまり意味なかった気がする」

ほとんど捨ててない。まだまだ使えるものがあるわけでそれに捨てるのがもったいなかったという理由で捨てなかったわけだ。いや、わかってるんだけどね。捨てないといけないってのは。

「透さん、物置の中のそうじ終わりました。いつでも戻せますよ」

「ああ、キクありがとう」

「いえ、やりがいがあったて楽しかったですよ」

「そうか」

さすがハウキ掃除は楽しいんだな。

「さて、あとは……………ん？」

そこで僕はあるものを見つけた。

「電灯か」

昔、僕が使っていた電灯。

「懐かしいなこんなところにあつたのか」

いつから忘れていたのだろうか。昔はよく使っていたはずなのに、いつの間にか使わなくなつてこんなところに置き去りにしてほこりにまみれさせていた。

「綺麗にしてあげよう」

綺麗なタオルで丁寧にほこりを拭いていく。

「よし、綺麗になつた」

そして拭き終わるのを待つていたかのように電灯が光り輝く。そして黄色い髪の少女が現れた。

「ようやく出てくれたわー！！ コラー！！ 透くお前うちをあんなほこりっぱいところに入れて忘れおつてからにー！！ こんな乙女をほこりまみれにした罪は重いでー！！」

若干関西弁でしゃべる少女が一気に言い切つた。

「え、あ、ああ、ごめん」

「うん、まあ、反省しとつたみたいやし、その……………綺麗に体拭いてくれたし……………」

赤くなる少女。何かそんな風に言われるとこっちまで恥ずかしくなる上になにか誤解されそうで怖いんだけど。

「つとと、赤くなつた場合やないで、言わなあかんことがあるんや、今まで使つてくれてありがとうな。ふふ、ようやく言えたで、これでも感謝しとつたんや、壊されて捨てられるだけやつたうちを引き

取って使ってくれたんやからな。まあ、ほこりまみれにされたのはちょっと怒ったけど」

昔の記憶が蘇る。そう、この電灯は昔、よく遊びに行っていた近所のおじいちゃんの家にあったものだ。幼稚園位の頃、そのおじいちゃんが引越すからという理由で古いしという理由で壊されて捨てられるところを譲ってもらったのだ。そうだったそれに確かあれつけたな。

「ささ、透名前付けてや」

「名前ならお前あるだろ」

「え？　そ、そんなんあったけ？」

「……………」

こいつ忘れるのか。まあ、こうなる前だし、しかもかなり前に一方的につけた名前だからな。忘れてても文句は言えないけど。でも悲しいな。

「そ、そんな捨てられた子犬のような目で見んといて」

「はあ、お前の名前はライだよ」

「ううーん、思い出せへんな」

「まあ、いいよ、今度は忘れんなよ」

「了解や！！」

自信満々に言うライ。本当に大丈夫だろうな。まあ、昔つけたのと同じ名前だし大丈夫だとは思うが。

「で、名前なんやったけ？」

「おおい！！」

「冗談や」

心配になった。

「はあ、とりあえず行くぞ」

「ん？ どこへ？」

「ほかのみんなに紹介するんだよ」

「うちというものがいながら他の女と！！？」

「誤解をまねくようなことを言うな！！」

「もう、冗談やって」

「冗談に聞こえないんだよ。頼むからシル達の前でそんなことは言わないでくれよ。」

「お兄ちゃん、終わった？………お兄ちゃんまたなの？」

「ああ」

「む、まあ、お兄ちゃんだから仕方ないか」

シルなんだその僕だから仕方ないから私たちが諦めますよ的な発言は。

「かわええ〜！！」

「きゃああああ！！」

いきなりライがシルに抱きつく。

「ああもう、めっちゃかわええな〜！　うり、うり」

「うにゃ〜！！」

ライによりもみくちやにされるシル。ひとつ発見ライって可愛いものを見るとめちゃくちやに可愛がる。見てる分にはほほえましいが

そろそろ止めるか。シルが助け求めてこっち見てるし。

「ほら、ライそろそろやめとけ、紹介が出来ないし、シルが嫌がってるからな」

「は！ あかん、つい体が勝手に、ごめんな」

「うう」

「はいはい、よしよし」

ちよっと涙ぐむシル。そして僕の後ろに隠れる。

「そんな姿もかわええな」

そしてまったく反省する気ゼロのライ。

「どうしたです」？

「……………うるさい」

シルの声を聞きつけてサクミとティーがやって来た。遅いだなんてツツコミはなしだ。しかし、この二人はちよつとまずい気がする。

「二人もかあい！」

案の定ライが二人に抱きつく。そして二人はシルと同じ道を辿った。

第十五話 紹介するだけで疲れる

「いやゝ、すまんすまん。ついな」

ライからティーとサクミを助け出したあと正気に戻ったライが言った。

「何がついだよ」

そのおかげでシル、サクミ、ティーの三人とも僕の後ろに隠れてしまっている。まあ、隠れ切れてないんだけど。

「危険です。身の危険を感じます」

「……………」

あらら、すっかりおびえちゃってる。

「ほら、お前ら大丈夫だから出る。紹介できないだろ」

おずおずと三人は僕の後ろから出てきた。

「電灯のライやよろしくな」

ライが元気に行った。

「シャーペンのシル」

「ラジオのティー」

「洗濯バサミのサクミです」

おずおずと三人も自己紹介する。

「あゝかわええ」

「抑えろライ」

「わ、わかつとる」

抑えないとまた同じことの繰り返しだからな。でも、あまり抑えられそうにないな。

「じゃあ、ちょっと待つてろ他の奴ら呼んでくるから」

そう言つてリビングを出る。

「ああゝもう、我慢でけへんゝ!!」

「きゃああああ!!」

「……………」

「によわああ!!」

三人の悲鳴が聞こえた気がするけど幻聴だろうな。うん、空耳だ。だつてそんな声聞こえないし。うん、そうだ幻聴だ。……………ごめんシル、サクミ、ティー。あとでケーキ作つてやるからな。それで機嫌直るだろうし。うん、よしそうしよう。

絶え間なく聞こえてくる悲鳴を考えないように現実逃避して僕はエミたちを呼びに行った。

「おい」

「お、なあ、見てくれよこれ」

部屋にいたエミが言う。

「なんだ？」

「これこれ」

見るとそれは。

「お前どこでそんなの拾って来た！！」

「そのゴミ捨て場。中々いいぜ」

エミが拾って来たのは俗に言うエロ本である。親父がお前は。てか、何で拾ってきてんだよ。

「勉強に」

「なんの勉強をするつもりだよ」

「そんなのわかってるだろ」

わかってるがそんなの信じたくないし。

「そんなことより、リビングに行ってくれ」

「お、新入りだな。行ってくるぜ」

「ああ」

さて、これでシルたちは助かるだろう。下手をすればエミとライで更に酷いことになるという可能性を完全に度外視した。

「さて、次だ次」

トウカの部屋に行く。

「トウカー？」

「なに？」

「いや、新しい家族が増えたので紹介するからリビングに行く
れないか？」

「そう」

トウカが僕の脇を通り過ぎる。

「……………裏切ったら刺す」

物騒なことを呟いていった。

「怖！！ 何、なんなの？ 裏切るって何が？」

意味がわからない。

「と、とりあえず気をつけよう」

その時――。

「クール……………！！！！」

「きゃあああああああ！！！！」

意味不明な叫びと悲鳴が聞こえてきた。

「トウカの叫び声初めて聞いたな」

さて、次は美鈴メイリンだな。部屋にいるかな。台所にはいなかったし。

「おい、美鈴メイリン！！」

返事がない。

「おかしいなどどこにいるんだ？」

「あれ、何してるアル？」

「美鈴メイリンどこいたんだ？ 呼んだけど返事もなかったし」

「ちよつとアル」

「そうか？」

何をしてたんだろうか。気になるが今はライのだな。

「リビングに行ってくれないか？」

「わかたアル、新入りアルネ」

「そうだ」

美鈴メイリンもリビングへとむかった。

「チャイナーー！！！」

「なにあるかああああああ！！」

何か下で叫びとか聞こえるけど気のせいだよなたぶん。

「……………これは悪戯に被害者を増やしてるだけじゃないのか？」

……………やめよう。本当。考えるのだけはやめよう。でも、あとが怖いな。

「さて、最後はキクだな。おゝいキク——すみませんでした！！」

キクの部屋のドアを開けた途端一瞬で閉めた。キクは着替え中でした。危ない危ないも少しで見えるところだった。見えてないよ

見えてない。断じて見えてないから。

「あ、あの透さん？」

「見てない、断じて見てないから」

「あ、いえ、着替え終わったので入ってきてもいいですよ」

「あ、ああ」

許可が出たので入る。キクはきちんと着替え終わっていた。まあ、当たり前だけど。気にしてないみたいだし。

「それで何か用ですか？」

「ああ、リビングに行ってくれないか？」

「新しい方ですか？」

話が早くて助かるな。他の奴らも早かったけど。

「ああ、行ってくれるか」

「はい」

キクが部屋を出て行った。

「はあ、ようやく全員呼べたよ。なんか疲れた。無駄に」

さてと、それなら僕も行かないとな。たぶん大変なことになってると思うし。

僕は階段を下りてリビングに向かった。

間章三

古道具屋古幻堂。

「ふむ、酷いことじゃな」

源さんが女性の言葉を聞きながら言った。

「はい、彼は常軌を逸しています。このままでは彼に使われるモノが可哀想です」

女性が悔しそうに顔をしかめる。

「かと言ってわしらが出来ることは見守ることじゃ。手を出すことは出来ん」

「……………絶対の禁ですね」

「ああ、破ればお前さんたちが消えてしまふ。それはわしには耐えられん」

源さんは女性の手を握りしめる。

「あゝ！！」

そこにツインテールのロリっ娘が入ってきた。

「カズハお姉ちゃんまたズルしてる！！」

「い、いえユズハこれは！」

カズハと言われた女性は急いで源さんの手を離し弁解を述べよう

とするがユズハの方が早かった。

「みんなカズハお姉ちゃんがまたズルしてるよー!!」

ユズハの一言で店の奥から六人の女性たちが出て来た。

「お前またかよ!!」

赤いくせつ毛でジージパンの女が言った。

「い、いえ、アキハこれはその」

カズハは慌てる。

「……………」

じつと無表情でカズハを睨む長い黒髪を引きずっている少女。

「な、ナズナもそんな怖い顔しないで」

ナズナの無表情に恐怖を感じるカズハ。

「ねえ、ここで今すぐ死ぬか。全裸で町中を歩いてから死ぬかどっちがいい？」

白髪で黒服をきた女性が言った。

「ナツハそれ結局死しかない!!」

カズハ結構限界である。

「今からネットにカズハの恥ずかしい過去とか自慰の映像を公開するです。安心するです。プライバシーだけはprotectです」

うずまきメガネをかけて陰湿に笑っている少女が言った。

「ウキハ！。それだけはやめてくださいー！！」

いつの間に撮られたのか恐ろしい。

「や、やっぱり喧嘩はよ、良くないです。だ、だから一週間源さんと話すのき、禁止にしたらどうかと」

白のワンピースをきた気弱そうな女の子が言った。羊みたいないメージがある。

「ゆ、ユキハ、それ嘘でしょ」

ユキハの意見に絶望するカズハ。

「アハハハハ殺しちゃおっか」

狂ったように笑う少女。

「い、イクハお願いですから正気に戻って」

マジ泣きのカズハの懇願。

「これこれみんな仲良くせんか」

『はい』

全員が素直に頷いた。

（ふう、お前さんはわしによく似ておる。だから、奴なんかに負けるんじゃないぞ）

源さんは来るべき戦いに思いを馳せた。

第十六話 魔書？ そして姉現る（前書き）

そろそろストックがなくなってきた……。

第十六話 魔書？ そして姉現る

僕は意を決してリビングへと突入した。そこはまさに人がみてはいけない領域だった。そしてこの世界の言葉で表す最もな言葉は阿鼻叫喚の地獄——ではなくただの桃色空間だった。

僕は絶句した。何があったのはわからない。ただ唯一言うのならまさしくそこは人が見るには早すぎる光景だと言ふことだ。

そんな異世界と僕は戦った。つらく長く厳しいわけではい戦いだった。そして目的である自己紹介を行ったのだった。

今は全員リビングのソファーに座りとくに僕の周りでリラックスしたかのようにしている。

が実は全員気力切れで死んでいたただけだが。

「あ！」

そんなときキクが声を上げた。

「どうした？」

「忘れていました。透さんに見せるものがあるんでした」

キクが客間に入っていつて古びた革表紙の本を持ってきた。

「これが物置から出てきたのです」

本は鍵がつけられ厳重に封印されていた。

「いったいなにかかれてるんだ？」

「わかりません」

まあ、こんな風に嚴重に封印されてたらわからないよな。

「うーん。鍵とか一緒に置いてなかったのか？」

「はい、これだけでした」

どうしようもないな。鍵がないんじゃ読むこと出来ないし。

「うーん、どうしようもないな」

「左様ですか。なら処分しますか？」

「いや、持っておこう。大事なものだと思っし」

ピンポーン。

その時チャイムがなった。

「ん、誰だ？」

誰か来たみたいだ。

「じゃあ、ちょっと出てくる。ここにいてくれよ」

「はい」

僕は立ち上がり玄関へと行く。

「はい」

扉を開けるといきなり僕の前が暗くなった。

「ふー!!」

そこで誰かに抱きしめられたということに気がついた。やわらかい感触が顔面を覆う。

「もー会いたかったわー透ー!!」

こ、この声は!?

「ちょ、離せ!! 息が!!」

「あ、ごめんごめん」

ようやく僕は解放された。

「ふう、何しに来たんだよ。姉さん」

このスタイルの良すぎな女は僕の実の姉、望月優香^{もちづきゆうか}。マイペースでブラコンである。やめてほしいものだけど。

「何ってまったく連絡をくれないんだもん。お父さんたちも心配してんだよ」

色々あって確かにこの頃連絡は出来ていなかったから何も言えないな。

「色々あったんだよ」

「ふうん、で、透から知らない女の子の匂いがしてるんだけど色々ってそれに関係ある?」

「な、何のことだ？」

匂いがわかるってどんな嗅覚だ。犬かよ。……………でも、そうだな紹介するなら今だな。

「まあ、連絡できなかったことに関係がある」

「そう……怒らないから言って見なさい」

いやいや、もう怒ってるじゃん。顔は笑ってるけどまったく目が笑ってないよ。これは確実に姉ちゃんは怒っているときの反応だ。

「えっと、そうだね。……………ほら、ここ民宿だったじゃん」

「そうね……だから？」

やばい、物凄く怖い。でも言わなくちゃ。たぶんティーがこれを聞いているはずだから状況は向こうに伝わってるはず。そしたらキクが何とかしてくれるはず。とにかくしてくれなければ僕が終わる。

「だから……受け入れたんだよね」

「何を？」

わかってるくせに。やっぱり自分で言わなきゃいけないんだな。

「入居者……」

ヒュン！！

言った瞬間僕の頬を何かが掠めた。それがナイフだとわかるまでに一秒くらいかった。

「え……」

何もいえなくなった。姉さんが僕の首筋にナイフを突き立てていたからだ。……やばい、ヤンデレだよ。これ。話に聞いたヤンデレだよこれ！！ たぶん。

「ねえ、それ、どういうこと……つまり、今アンタその何人かの女の子と暮らしてるってことでしょ……？」

黙って頷く。事実だし隠しても意味がない。てか、もう全部わかっているはずだ。

「ま、まあ、そうなるかな」

「ふん」

こ、怖い。これは死ぬかも。

「何で、隠してたわけ」

「いや、隠してたわけじゃないよ。ちょっと忙しくて連絡できなかったでそれに困ってる人たちだったし……」

「……………」

姉さんがナイフを引く。た、助かったのか？

「はあ、まあ、透の性格を考えたら頼まれたら断れないだろうし。透なら何も出来ないだろうし」

「そうそう！！」

あまり肯定はしたくないけれど今回はしかたない。

「それで、紹介してくれるんでしょ」

「うん、紹介するよ。じゃあ、上がって」

「ほい、おっじゃまします」

ふう、なんとか恐ろしいプレッシャーから解放された。とりあえずリビングへと姉さんと共に向かったのだった。

第十七話 モノたちもやれば出来るんです

リビングへ僕は姉さんともに恐れおののきながら向かった。ちゃんとごまかせるような状態になっているのか心配だ。物凄く。これでごまかせる状態でなかった場合僕は死ぬな。今のうちに遺書でも書いておこうか。いや、とりあえず聞いていたと思うティーを信じよう。うん。よし。

「透どうかしたの？ さっきから様子おかしいけど」

「い、いや、別におかしくないよ」

「そう？」

ふう、危ない。落ち着こう。こっついのは僕が落ちついてないと駄目なんだ。

「それで何人いるの？」

「えっと八人かな」

「へ」

そしてリビングに入る。

「あら、どなたですか？」

キクが入ってきた僕と姉さんを見て言った。そこにはキクとシルしか居なかった。どうやら、自分の部屋に戻ったようだ。さて、どうするんだろうか。

「どうも、透の姉の望月優香です」

「ああ、大家さんのお姉さんですかどうも。私は白木野菊しろぎのきくと申しま

す。この子は詩瑠^{しる}で私の娘です。ほら、詩瑠挨拶

「は、はじめまして」

シルはキクの影に隠れながら言った。親子設定か。うん、あつて
る。適任だよ。まあ。きついと思うけど。

「はじめまして、えっと、菊さんはどうして透のところ？」

「はい、夫と離婚して行くところがないところを透さんにうちに来
ないかといわれておかげで路頭にまよわないですみました」

「そうですか、アンタそういうことなら早く言いなさいよ。まっ
たくいーことするわね」

ふう、よかったごまかせたな。なんとかなるな。この調子なら。

「おーい、透、誰か来てるのか？」

エミがリビングに入ってきた。

「お、誰だ、その姉ちゃんは？」

「えっと姉さんだよ」

「望月優香よ」

「そっか、あたしは波佐見^{はさみ}絵美。大学生だ。いや、安く住めると
こがなくてさあ、困ってたところを透に拾われてな」

おお、エミもちゃんとしてる。なんか後ろでキクが睨んでるけど。
めっちゃ言い聞かせたんだろうな。

「そうなんですか」

「なんです？ 姉さん、なんの騒ぎです」

サクミがやって来た。

「おう、朔美^{さくみ}。ちょうどいいところにきたな。あの透の姉が来てるぞ」
「はあ、姉さんもう少しおとなしくしてください。ただでさえ大家の透さんには迷惑かけてるんですから」

こいつらが姉妹って結構問題ないか？ 姉さんもさすがに疑うだろ。

「いいのよ、透が迷惑するだけなんだから。どんどん迷惑かけても」
「だよな」

「姉さん。とりあえず礼儀を知れです」

……………気がついてなかった。明らかに似てないだろ。エミ、髪赤いんだぞ気づけよ。いや、気づくな。

「まったく。ごめんなさいです大家さん」
「いいよ。いつものことだし」

話しているとトウカが入ってきた。

「こんにちは」

「こんにちは。あなた高校生？」

トウカが頷く。

「桃香、姉さんの望月優香だよ」

トウカに僕は姉さんを紹介する。続いてトウカも自己紹介をした。

「おじやうつか

「氷野桃香。 高校二年」

「そうなんだ。 透と同級生なんだ」

「そんなところ」

うまくごまかしてくれている。 助かるよ本当に。 このままばれな
いでいてほしい。

「へへ、 あんたこんな可愛い子がいてなにもしてないとかおかしく
ない？」

いや、 してたら姉さんが僕を殺す的なこといってませんでしたか？

「ただいまアルー！！」

話していると美鈴メイリンの声が響いてきた。 どうやって外に出たんだ？
玄関で姉さんと話しているときには気づかなかったぞ。

「お、 オオヤの姉貴アルカ？ ワタシ美鈴メイリン言っね。 中国から来たア
ル」

「へえ、 留学生なんだ」

「そうアル。 金なくて困つてるとこ助けてもらったアル」

「そうなんだ。 ってことは中華料理食べ放題！？」

姉さん…… もつとほかに聞くことというか食いつくところあるでし
ょうに。

「確かに台所は週に二回は担当してるアル」

「うらやましいぞ透」

「やめろ、 小突くな」

姉さんから小突かれているとライとティーがやって来た。この一番説しづらい二人をどうするのだろうか。とりあえずティーはゴールをどこかに置いてきたらしい。いまは持っていない。

「なんやなんや、楽しいそなことになつとるな」

「……………誰？」

ティーとライだけど一体どんな名前になっているのだろうか。と
いつか明らかに日本人ではないけど留学生にするのか？

「おお、透の姉貴やな。うちはライ・トワイライト。関西人や！！
で、こっちの無口なのがティー・レイデオうちの相方や」

「…………ナデヤネン」

……………。物凄いものを僕は見ている気がする。というかティー
物凄い棒読みだなおい。

「まさか、芸人がいるなんて！？」

姉さんの頭はいったいどうなっているんでしょうねえ。

「とまあ、そんな冗談はさておき。透から話は聞いとるで！！」
「……………」

なんか色々あったがとりあえずこれで全員紹介できたな。

「これで全員だよ」

「アンタもお人よしよね」

「うるさいよ。それは自覚してる」

まあ、普通の理由ではないし。もともと全員うちにいたんだからね。姉さんも見たことあると思うんだけどね。こうなる前は。

「まあ、でも、安心した。悪い人かも知れないと思ったけどみんな良い人みたいだし」

「そうだよ、みんな良い人たちだよ。だから、何も心配することなんてないよ」

「そうね」

こうして無事なんとかモノたちの正体がバレることなく僕の命も無事に紹介し終えたのであった。やるときはきちんとできるんだなと実感した。

第十八話 開本

「それで、姉さんは結局のところ何をしに来たの？」

モノたちを紹介し終えたあと落ち着いたところで姉さんに聞く。

「言ったでしょ。様子見に来たの」

「それなら電話でもいいだろし。去年は連絡しなくても来なかったし」

それなのに今年はなぜか姉さんが来た。きっと何か理由があるのだ。

「まあ、透ならそういうと思ってたけど。今回はこれよ」

姉さんが胸の谷間から鍵を取り出す。なんてここにいれてんだあんたは。

「だって、ここなら盗まれないでしょ」

そういう問題ではない。というか盗まれなくても落としたらどうするんだよ。

「大丈夫。落ちるわけないわよ」

まあ、そうですね。ボリウムがすごいでもんね。

「で、何の鍵？　というかなぜに鍵もってきたの？」

「んっとね、透は叔父様のこと覚えてる？」

「確か小さい頃に何回かだけ会ったことあるよ。けどそのあとすぐに亡くなったし。あまり覚えてないな」

僕の叔父は骨董品の収集家だったようで。珍しいものを集めてはコレクションしていたらしい。それに物持ちが物凄くよかつたらしくどんなものでも大切に使っていたそうだ。僕のその辺りの性格は叔父譲りだと親戚からはよく言われる。

「そうね。でね、亡くなったときは当然遺言があるでしょ」

「そりゃ当然だね」

「それで、遺言の中に今日この日にこの鍵を透に届けるようについて書いてあったのよ」

それで様子見ついでに届けにきたってわけか。

「だから、はい、これ」

姉さんから鍵を受け取る。黒くて古い鍵だ。よく映画とかで城の鍵とかで出てきそうなやつ。

「さて、じゃあ目的も果たしたし。あたし帰るね」

「部屋あるから。泊まってけばいいのに」

「そうしたいのはやまやまだけど」

ウインクする姉さん。

「これから、合コンなの」

へへ珍しいな姉さんそういうの興味なさそうにしてるのに。

「うーん、どうしてもって頼まれちゃってね。大丈夫。あたしは常に透のものだから」

「謹んでお断りします」

姉さんは負担にしか鳴らないと思うからな。

「まったく照れちゃって。じゃあ、行くわね」

姉さんはそそくさと出て行った。そしてすぐ戻ってきた。

「そうそう、近々父さんたちが迎えに来るからって」

「は!?!」

「伝えたからね」

そしてまたすぐ出て行った。

「ちょっとどういうことだよ!?!」

すぐに追いかけたが姉さんの姿は既に消えていた。

「早いよまったく」

とりあえず来る前には連絡があるだろうからそのときに考えよう。まずはこの鍵だ。なんとなくうちにあるものでこの鍵が合致するのはあれしかない。

「お兄ちゃんのお姉ちゃん凄い人だね」

シルが言った。

「嵐みたいだったよ」

「そうだな、まあ、人前だからあの程度なんだけどな」

「ということは普段はもっとすごいと思っていいいんです？」

サクミが言ったので頷く。

「恐ろしいです」

「そうか？ あたしとしては面白かったけどな」

エミからしたらタイプ同じだろうからな。

「それよりも透さん先程の鍵は」

「ああ、たぶんキクが思っている通りあの本の鍵と思う」

それ以外に思いつくものはない。どこかの隠し部屋の鍵とか言われたらどうしようもないけど。

「試してみたら」

トウカの言うとおりますは試さないとな。

「ほれ、モテキタアル」

美鈴メイリンがあの本を持ってきてくれた。

「よし、開けてみるぞ」

リビングのテーブルの上に本を置き鍵を鍵穴に差込回した。

ガチャリと何かが開く音と共に僕の視界は全て白で埋め尽くされ

た。

第十九話 記憶の書

そこはどこかの屋敷だった。屋敷の周辺は山に囲まれている。山の向こう側は真っ白で何も無い。ただ、真っ白な空間にこの山に囲まれた屋敷は存在していた。ただただ、空虚な空間の中でそれは圧倒的存在として君臨していた。その中庭と思われる場所に僕は立っていた。

「ここは……どこだ？」

僕はさっきまで家のリビングで姉貴が持ってきた鍵を使って嚴重に封印が施されていた本をあけたと言うか鍵を回しただけなのだ。こんななどことも知れない屋敷に……。

「いや、見覚えがあるような……」

この屋敷には昔来たことがあるような気がする。中庭の噴水、重厚な門の装飾、植えられた薔薇。そのどれもが見たことがあるような気がする。それがいつどこでだったのか思い出せないが。この屋敷には昔来たことがある。

「まあ、気のせいかもしれないな」

山の向こうが真っ白い空間だし。明らかに現実味がない。人っ子一人いないのだから。現実かどうか確かめようがない。

「おーい、シルー！」

返事はない。シルは近くにはいないようだ。

「キク、トウカー!!」

これまた返事がない。この二人もいない。

「エミ、美鈴^{メイリン}――!!」

返事がない。

「サクミ、ティー、ライー――!!」

耳をすませるが返事は聞こえない。下手をすれば山彦で僕の声が帰ってきそうな静けさすらある。

「返事がないならここにるのは僕だけか」

さて、どうしたものかな。あいつらなら僕がいなくてもなんとかなるけど。僕としては誰か一人でもここにいてほしかったよ。僕一人じゃ何もできないからな。

「とりあえず屋敷の中に入ってみるか。外はなにがあるかわからないし」

それは屋敷の中も同じだがどの程度の広さかわからない外よりはどの程度かわかる屋敷を探索したほうが安全だろう。それに誰か人がいるのかもしれない。叫んでも誰も来なかった時点で望み薄だけだ。

屋敷の扉に鍵はかかっていなかった。扉はきしむことなく開いた。エントランスには豪華な装飾がなされていた。シャンデリアなんて

はじめてみた。さすがに実家でもシャンデリアはなかった。

「おい、誰かいませんか」

しゅん。

「……………返事なしか」

誰もいないのかそれとも広すぎて誰にも聞こえていないのか。

「とにかく探索だな」

ゲームとかでもこういうときは探索をするものだ。なにか役に立つものがあるかもしれない。

「といつてもどこをどうさがせばいいのやら」

大体たんすとかを探れば色々出て来るんだろうけど。どこに行っても迷いそうなんだよな。馬鹿でかい屋敷のエントランスも当然のごとくでかいためどこから手をつけて良いのかわからない。

「とりあえず一部屋ずつ見ていくか」

左の方にあつた扉をあける。かなり広い廊下に出た。

「いきなりたいへんじゃねえか」

どう、考えても一人で探索するには広すぎるだろ。モノたちがいればなんとかなるだろうけど、ここにはいない。

「いないのにその力を期待してもダメか」

それにしても広いな。いったい誰が作ったのやら。そうとうな金持ちだろうけど。

「それにしてもどこかでみたことがあるな、本当に」

廊下の端に階段があったので上る。部屋の中には何もなかった。ただ、綺麗に手入れされて寝室などの部屋ばかりだったのだ。だから、階段を上がる。二階も同じような感じであったので三階へ上がった。

三階には部屋はひとつしかなかった。他の扉よりも豪華であった。おそらく当主の部屋だったのではないだろうか。

「ここなら、誰がいるかもしれないな。入ってみよう」

一応ノックして入る。そこには桃源郷が広がっていた。

第二十話 叔父

中はかなり広い書斎で本棚は天井まで届いていた。一部屋ではなく二部屋ほどあるらしく扉がある。

……わかつてるよ。少しくらい現実から目をそらしたかっただけなんだ。見たものがすごすぎて。うん、やばすぎて。

そう、僕の目の前は桃源郷が広がっていた。意味がわからないか？ そのままの意味だ、簡単に言えば裸の男にたくさんの裸の女が群がっている。これだけなら、問題はないだろう。え？ 問題だつて、まあ、までこの不思議空間の中ではあまり問題にならないという意味だ。人がいるんだからな。問題なのは、その男だ。まったく俺と同じ顔をしていた。いや、よく見ればどこか違うような気がするが、さすがに凝視できるような状態ではない。

「ほら、これはどうだ？」

「あんっ！ い、いいです」

よし、逃げよう。これ以上いるとまずい。いや、最初からまずい。部屋を出ようと振り向いた。

「待てよ」

僕より少し低い声で呼び止められた。やっぱり逃がしてはくれないんだ。ゆっくりと振り返る。そこには先ほどと同じ桃源郷が展開されているが、がんばって目に入れないようにする。

「なんでしょう」

「せっかく会えたのにどこいこうってんだよ」

この状況でどこかへ行かないほうがおかしいだろう。それとも、僕の方がおかしいのか？ いや、それだけはないと思いたい。

「い、いや、邪魔かと思って」

「ふむ、まあ邪魔かといえば邪魔なんだが、せつかく孫が訪ねてきたんだおいかえすわけないだろ」

ん？ さっきこいつはなにを言った。孫？ つまりこの桃源郷の主である僕もどきは俺の叔父さん？ いやいや、まさか、だって僕とさほど年恰好変わらないぞ。確かにここはよくわからない空間だからなにがあっても不思議じゃないけどさ、さすがにありえんだろう。

もう一度目の前の僕もどきを見る。驚いたことに桃源郷は消え普通の格好に戻っていた。よかったよ本当に。

「それはどうということなんだ？」

「だから、俺はお前の叔父だ。お前にわかりやすい姿で出てきてるんだ」

………………。えっと、つまり、こいつが僕の叔父、そういうことだよな。信じられん。父さんたちに聞いた話しによれば、優しい人だと聞いたのだが。モノをいつまでも大切にする人だと。

だが、目の前の叔父（仮）はイメージとはかなり違う。

「……………」

「信じてないだろ。まあ、俺も、昔は信じられなかったがな。それで、モノたちとの生活はどうだ？」

「なんで!？」

なんで、そんなことを知っている。死んだはずの叔父が知ってい

るはずない。

「不思議に思っているな」

「誰にも言っていないのにどうして」

「簡単な話だ。俺もお前と似たような状況に陥ったことがあるからな」

「な!？」

そんな話は初耳だった。叔父が僕と同じ状況に陥っただって、それはつまり、ものが擬人化したということだ。同じことが昔もあった。驚き以外のなにものでもない。

「やっぱ、知らなかったか。まあ、誰にも話してねえし。さて、じ

ゃあ、俺も仕事するかな」

「仕事？」

「ああ、お前に全てを話すというな。まあ、すぐに全部は話せないが、なんで、ものが擬人化してモノになるか、お前に話してやるよ」

この叔父は一体何を知っているのだろうか。遂に叔父の口から語られる。

間章 四（前書き）

この間章四には、皆様を不快にさせる表現がたくさん盛り込まれています。別に読まなくても大丈夫な話ですので、苦手な方は戻ってください。

誤字など修正。更に鬼畜度アップ。

間章 四

少年は足で女の頭を踏みにじって笑っていた。しかも、靴の裏には鑢と画鋏が仕込んである。見れば、少年が座っているのも女だ。手足を釘で床に縫い付けられ、更に腹の下には、突起がおりてあり、少しでも力を抜けば刺さるようになっていた。ほかにも部屋の中にはたくさんの女がいた。

爪をはがされた女。目をえぐられた女。歯を無理矢理抜かれ釘を刺された女。耳に工具を突っ込まれ溶けた金属を流し込まれた女。耳をそがれた女。鼻をそがれた女。手足を釘に打ち付けられ磔にされた女。指を切られ、代わりにドライバーが刺さっている女。腕と足を切られた、代わりに材木が刺さっている女。体中に針が刺された女。焼けた鉄板の上に乗せられ、肉の焼ける匂いを漂わせる女。巨大な鉄球に潰されている女。鈍器で殴られ続ける女。ピラニアの水槽に入れられ、少しずつ喰われる女。強力な電気を流され続ける女。陰部に赤く燃える火かき棒を突っ込まれた女。みんながみんな酷い状態でかろうじて生きていた。

一部の女だけが、酷い状態の女たちを見下して、快適に過ごしていた。

「おうおい、そんなんでいいのかよ。あ？ お前にプライドはないんですかあ？ 馬鹿なんですかあ？ なあ、言ってみるよ。ほら、言えよ」

足でぐりぐりと女の頭を踏む。鑢ですれ、画鋏が刺さっても女は床にはいつくばったまま何も言わない。目には生気の欠片もない。そんな女の反応が面白くないのか、少年はナイフを取り出す。

「さうと、ど・こ・に・刺・そ・う・か・な。ここだ」

手の甲に刺す。女は苦悶の表情を浮かべるが言葉は発さない。そういう命令だからだ。少年の命令はたとえどんなに残酷なことでも従わなくてはならない。

少年は、面白くなさそうにする。

「つまんねえ。なあ、お前、面白いことしろよ。おい」

ぐりぐりと、踏みにじる。仕込まれた鑢で女の頭が削れ、画鋏により擦過傷を作り、血が出るが、少年は気にしない。

「何か言ったらどうだ」

「……………」

それでも、女は何も言わない。

「おい」

少年が執事と呼ぶ。

「はい」

すぐに呼びかけに応じ、老執事がやって来た。

「なにか御用でしょうか」

「はさみ、もってこい。切れ味悪い奴な」

「かしこまりました」

一端部屋を出て行く執事。すぐにはさみを持って戻ってきた。

「どうぞ」

執事が少年にはさみを渡す。はさみを受け取ると、少年が踏みつけていた女の髪を引つ張り、起こす。

少年は無理矢理、女の口をあけ舌を引つ張り出す。

「最終勧告です。何か言えばやめてやるよ。喋らないなら、いい舌を切り刻んで、切り落としてやる」

女は何も言わなかった。別に喋れないわけではないのに、喋らなかった。それが命令だったから。少年の言って言うことは理不尽以外のなにものでもない。

「ふん、じゃあ切ろう。まあ喋っても切り落とすけどねえ！」

少年は女の舌にはさみをあてがい、笑いながら閉じた。女の体が痛みで震える。だが、完全に舌は切れない。だから、少年は何度も、はさみを閉じる。笑いながら、何度も何度も。ようやく舌が切れた。女はショックで失禁していた。

「まだだよ。そのままじゃ死んじまうからなあ、優しい、優しい俺は対策を用意したんだよお」

少年が釘とハンマーを取り出す。そして切って残っている舌を釘で押さえつける。

「舌を切ると巻き込んでちっすくするからなあ、だから釘打って止めちまおう」

そして舌を下顎に打ち付けた。気絶から無理矢理叩き起こされた

女がのたうち回る。

「ヒヤハハハハハ！ 傑作だなおい！」

「次！」

「坊ちやま、それで最後です」

「チツ、そうか」

少年はつまらなそうにする。

「ねえねえ、マスター」

快適に過ごしていた女の一人が甘い口調で言う。金髪赤眼で、髪をツインテールにしている女だ。

「今度は私たちの相手してくださいよ。もう、マスターを見るだけで、私濡れてしまいましたわ、ほら」

金髪の女はスカートをたくしあげ秘所を晒す。

「……ワタシモヌレタ」

ウェーブのかかった紫髪の少女が片言で言う。こちらははなから隠す気などないのか、布を巻いているだけだ。今はそれを外している。

「ニヤハハハハ、うちもうちも！」

猫のような雰囲気のある、赤髪の少女が笑いながら言う。

「……………わたしも……………」

海のようなコバルトブルーの髪と瞳の少女も言う。

「私は、どうでも良いわ」

茶髪ショートヘアの少女は気のないように言うが、どことなく期待した感じだ。

「そうだなあ、壊すのも疲れたしい、今度はぐちゃぐちゃにしてやるかあ」

少年は女達と部屋を出て行った。酷い状態の女たちは、そのまま置かれていた。

間章 四（後書き）

書いてて殺したくなったキャラはこいつが初めてです。この鬼畜外道。

自分的に結構鬼畜に表現したのですが、どうだったでしょうか？
ぬるすぎだと言われそうですがこれが限界です。すみません。
しかし、この鬼畜外道（仮）君。まだ名前、決まっていないますよ
ね。というわけで、名前募集します。悪役っぽい名前を募集。当選
は、あとがきで、お知らせします。

第二十一話 一端

「さて、何から話そうか」

最初から全て話してほしいけどね。まあ、何かそれは無理そうだな。なんとなくだが。

「出来れば全部話してほしって顔だな」

「ワケがわからないからな」

「そりゃそうか、俺も最初はそう思ったからな。そうだな、まずは、どうして擬人化が起こるかだな」

ようやくだな。

「とりあえず座るといい」

叔父が椅子に座る。僕も向かい側に座る。じゃあ、聞かせてもらおうか。

「さてと、俺名乗ったっけ？」

「？ 名乗ってないんじゃないのか？ でも、名前は知ってるぞ」

「あゝ、ここではそれダメなんだよ。詳しくは言えないけど」

なんだそりゃ。

「よし、じゃあ、俺のことは、銀二とでも呼んでくれ」

なぜに、銀二。てか、どこからそんな名前出てきた。

「よし、じゃあ、話そう」

銀二が語り始めた。

「九十九年に一度、物を擬人化させることの出来る人間が二人現れる」

「二人？」

一人は僕だな。つまり、もう、一人どこかにいるわけか。こんなビツクリな人間が二人もいるのか。……自分で言って、ちよつと悲しくなった。

「ああ、そうだ、それで、九十九年前には、俺ともう、一人が選ばれたわけだ」

「だが、なんでそんなのが選ばれるんだ？」

「それはな、世界を書き換えるためだ」

「は？」

世界を書き換える？ どういうことだ。いや、つまりはそういうことなんだろう。そのままの言葉の意味なんだろう。世界を書き換える。つまりは、自分の好きなような世界を作れるってことなんだろう。だが、何のために？ 誰がそんなことを始めたんだ。

「それは、まだ、言えないな。人間とは違う高位の存在だとしか言えない。この空間もあいつが作ったものだしな」

「あいつ？」

「まあ、それはいい。それで、モノを擬人化させることの出来る俺たちは、九月十九日より、大いなる意思により、戦うことになる」

な、なんだって！？ 戦うだと。つまり、あいつらは戦うために

生み出されたということなのか。

「端的に言えばそうなるが、モノたちは、世界が与える駒だ。それをつまぐ使い、相手を倒し、資格を奪う。そうすることにより、どちらか一人が世界を書き換えることが出来るようになる」

「つまり……」

つまり、いずれは、あいつらと共に僕は、戦わなければならないということか……。もっと、驚くかと思ったが、そうでもなかった。どうやら、僕は、初めからなんとなくわかっていたようだ。ただ、そんなことを考えた奴をぶん殴りたくなった。どうして、あいつらが戦わなくちゃいけないんだ。

「お前の思ってる通りだよ。そういうことだ。まあ、俺も昔はそう思ったよ」

「それなら、銀二はどうしたんだ？」

「俺は何もしなかった。いや、出来なかった。絶対の禁をやぶれば、あいつらが消える。そんなのは俺は嫌だった。これは言い訳だ。だから、お前が代わりにやれ、俺に出来なかったことを、俺が見れなかったものを見せてくれ」

そんなこと、言われたって。まだまだ、わからないことだけだっというのに。それでどうしろっというんだ。

「確かに、だが、それでもお前にしか出来ないことだ。それに、嫌でも戦うことになる。心しておけ。っと、そろそろ時間だな」

屋敷全体にひびが入る。

「ちょっと待ってくれ！！ 僕はどうしたらいい！！」

「お前の好きなようにやれ。俺はまた、お前をここに呼ぶ。その時にまた話をしてやる」
「まっ！！」

その瞬間、空間が割れ、僕の意識は奈落へと沈んだ。

第二十二話 鍵なのか？

目を開けると、見慣れたりビングと、モノたちが居た。戻ってきたようだが……。時計を確認する。本を開けたときから、まったく進んでいなかった。あれほど、色々話したがやはり、おかしい現象がおきていたようだ。

「お兄ちゃん？」

シルが微動だにしない僕の顔を心配そうに覗き込んできた。

「あ、ああ、大丈夫だ。ちょっとな」

「そう？ 大丈夫？」

「大丈夫だよ」

とりあえず、あのことを話すのは、今はやめておこう。それに、こいつらは知っているのかもしれないしな。今は、この本を見るのが先だ。

「さてと、何が書かれているのかな」

いつもどおりに振舞って、本を見る。

『え？』

全員が驚く、いや、見えていないティール以外が驚いた。そこには何もかかれていなかった。白紙、全てのページが白紙であった。いくらページをめくっても、何もかかれてなどいなかった。

「え、なにこれ？」
「おかしいですね」

シルがぺらぺらとページをめくる、それを横で見ながらサクミが言った。

「……………？」

目が見えていないティーが首をかしげる。ティーにキクが説明する。

「えっと、本なのに何も書かれていないんですよ」
「……………おかしい」

キクの説明で納得して頷くティー。

「ま、まさかこれは!？」
「ライ、なにかわかったのか!？」
「いや、なにもわからへん」

ちよつと空気が悪くなった。

「おい」
「い、いや、ちよつと場を和ませようかと」

別に和ませんでいい。それを言う気力もなくなした。とりあえず、どうしようこれ。

「凍らせてみる？」
「いや、トウカそれはやめよう」

もつと読めなくなる。

「あぶりだしかもしれねえぜ！ 燃やそうぜ！！」

「待て！！ お前じゃ完全に炭になる！！ ってああー！！」

エミが出した炎が本を直撃。本が炎に包まれる——と思った瞬間、炎が消えた。

「え？」

炎が本に触れた瞬間、炎が掻き消えた。本はまったくの無傷。こげた後も何もない。燃えもしていない。

「これはどういうことだ」

燃えない本だなんてありえない。いや、確かに僕の周りではありえないことが現在進行形でおきているが、これはない。世界の物理法則を完全に無視している。ありえてはいけないことが起きた。

「エミ、オマエ、何かしたアルか？」

メイリン
美鈴がエミの仕業ではないのかとエミに聞く。確かに、エミが何かしたのならそれで説明が出来るからな。

「あ？ あたしはなんもしてねえぜ、トウカじゃねえのか？」

エミの炎に対抗できるとすれば、この面子の中ではトウカだけだが、それなら、氷が残るだろ。いや、一瞬で解けたのなら、わからんでもないけど。本は濡れてないし。

「違う」

案の定、トウカは首を横に振った。つまり、この本が燃えなかったのは、正真正銘、この本の力ということになる。

『……………』

一同が黙り込んだ。この本をどう扱うべきかまったくわからない。というか、これくらい説明しておいてほしかったよ銀二。

「はあ、わからないことを永遠考え込んで仕方ない。とりあえず、この本はなにやら、重要そうだから、嚴重に締まっておこう」

そのほうがいい、無駄にどこかにもって行ったりして、誰かに盗まれてもしたらやばいだろう。いや、こんな本誰が盗むんだって話だが。念には念を入れておこう。

「ですね。こういうものは、わかりませんが、とにかくこれは護らなければいけないと私は思います」

「シルもー！」

キクとシルだけでなく、他のみんなも同じ意見らしい。僕もその意見には賛成だから、いいな。

「じゃあ、閉まっておこう」

本を部屋に持っていく。

「……………これが鍵なのか……………」

その弦きに銀一も、他の誰も答えてはくれなかった。

第二十三話 父母来る

八月の中旬が過ぎて、もう、そろそろ夏が終わるなといった頃。それは唐突にやって来た。連絡もなく、通知もなく、やって来た。

ピンポーン。

チャイムがなった。

「あ、お客さんみたいですわね、私が出ましようか？」

キクが言うが断る。もし、友達とかが尋ねてきて、最初にキクが出たら弁解が難しくなる。僕が出たほうがいい。他のやつもわかりだ。まあ、こんな時期に遊びに来る奴はいないだろう。なぜか、一切友達が遊びに誘いにこなかったからな。本当に友達かと疑いたくなるぜ。薄情な奴らばかりだ。まあ、誘われたところで、シルたちがいるからむやみにどこかにいけないんだけど。

ピンポーン。

おっと考えてる間にもう一回チャイムが鳴らされた。早く出ないと。

「はい！」

「ようやくでたか、息子よあいたかったぞー！！」

「望月最終奥義旋龍脚！！」

「ぶねらー！！」

抱きつこうとしてきた、髭面のおっさんが吹き飛んだ。まだ、生

きているようだ。しぶとい。

「あらあら、透。また、強くなったんじゃない？」

その男の隣には、かなり若く見える麦藁帽子をかぶった女性が居た。

「はあ、何しに來たの母さん」

そう、この人は僕の母さんの望月姫子^{もちつきぎみこ}。若作りしてないのに、端からみたら十代後半から、二十代前半にしか見えないといった化物。こう見えて武術の達人だったりする。母さんには逆らえない。

で、その横で僕の蹴りを喰らって倒れている変態は、認めたくはないが父さんの望月健^{もちつきけん}。なぜか、息子の僕を溺愛している変態だ。変態以外に説明することがない。会社はそれなりに成功しているが、それだけだ。母さんの方が儲けてるし。

「父さんは無視か！！」

なんだ、変な声が聞こえたぞ。いや、空耳か。疲れてるのか？ ああ、そうかもな、いきなりシルたちとか現れたし。知らないうちに疲れがたまってたんだろう。

「ふふふ、一週間休みが取れたから、一緒に旅行に行こうかともって來たのよ」

「今から！？」

「そうよ～ふふふ楽しみね～」

いやいやいや、今からって、結構問題じゃん。せめて連絡しといてよ。準備まったく出来てない。てか、なんで伝えなかったんだよ。

「何も言わないほうが驚くと思ってな」

「お前か!!」

容赦なく鳩尾を殴る。

「ぐはっ！ いい拳だ。わが息子ながらやる……な」

はあ。なんで、こんな奴の息子なんだろう。いや、溺愛されることについては、まあ、結構いいんだが、何しても許されるし。でも、この父親がついてくるのは、ダメだ。まあ、気絶したからとりあえず、話を。

「お兄ちゃんどうしたの？ 何か大きな音が聞こえたけど」

そう言いながらシルが出てきた。当然、父さんと母さんと鉢合わせするわけで。

「あ」

「あ」

「あちゃ」

話すつもりだったけど。こないきなりではない。

「あらあら、透さん、この子はどこからさらってきたのかしら」

怖い！ 母さん顔は笑ってるけど、まったく目が笑ってない。

「え、えっと、その、ほらこの家かなり家あまってるだろ。だから、困ってる人たちに貸し出してるんだよ。で、この子はその人の子供」

「ふん」

う、母さんってかなり鋭いからな。そんなにじろじろ見ないでくれ。

「そうなの、母さんてつきりどこからか誘拐してきたのかと思ったわ」

実の息子を誘拐犯だと疑うか普通？ まあ、母さんって結構普通じゃないからな。納得してくれて助かった。あのままだったら何をされたか。想像もしたくない。

「誘拐なんかするわけないだろ。ちゃんと紹介するから上がって」

「あら、まだいるの？」

「うん、結構大勢」

「ふん」

あれ、母さんの目が怪しく光った気がするんだが、気のせいかな？
うん、気のせいだな。さて、父さんが入ってくる前に鍵を閉めと。

「うおおおおお！！！！ なぜ、鍵がああああああ！！！！」

「そこで朽ち果てろ」

さて、邪魔者はこれでこない。

「ふ、舐めるな。ピッキングの技術などとうに習得しとるわ！！」

「警察に捕まれ！！！！」

「あびば！！！！」

がちや。父さんを吹き飛ばし、再度鍵をかける。今度はチェーンもかける。これで完璧だろう。庭側の窓も完全に閉めている。そもそも、あいつらがいるから、入ってこれないだろう。入ってきても撃退してくれそうだし。

「じゃあ、紹介するよ」

リビングに行き母さんにみんなを紹介した。

第二十三話 父母来る（後書き）

さて、透君の協力両親登場。

ぶっちゃけます。変態親父書きやすい！！ 今、この小説の中のキヤラで一番書きやすかったです。

あと鬼畜外道の名前は募集中です。誰でもいいのでお願いします。何でもいいです。面白い名前でもいいです。お願いします。

ついでにこれもさらしてみる
年齢を順に並べるところなる。

美鈴^{メイリン}>キク>エミ>ライ>トウカ>ティー>サクミ>シル

実際の年齢順です。美鈴^{メイリン}は若く見えますが中華鍋って歴史長そうなので実は一番年上。ヘタ。アの中国と同じと思ってください。

第二十四話 旅行へ

「——というわけで、みんなうちに住むことになったんだよ」

「……………あらあら、すごいハーレムね。まるでお父さんみたい」

笑いながら言うが、先ほどと同じくまったく目は笑っていない。

「うぐ」

目がまったく笑っていない母さんが言う。母さん、父さんと同列に見ることだけはやめて欲しい。けど、そういいだせない。無理。何か、殺されそうな気がするし。

「ふふふ、冗談よ。怖がる透さんも可愛いからついね」

「まったく嬉しくないよ」

「もう、つれないわね」

いや、実の母に、そんな感情を抱いたらどうなるんですか。まずいでしょ。

「別にいいのよ」

「いや、あんたが良くても僕が無理だから」

「もう、父さんの子供なのにねえ」

「一体父さんに何があったの!？」

母さんの含み笑いが怖い。みんなもドン引きしてるし。

「それにしても……………」

母さんがみんなを見渡す。

「この子、この子が可愛いわ!」

ティーを抱き寄せる母さん。ティーはいきなりのことと、なす術もなく、母さんの腕の中に納まっている。

「……………!!?!?!?」

「うふふ、可愛いわね。盲目ってところがまた、たまらないわ」

ああ、母さんが壊れたかもしれない。

「それに、この子たちも可愛いわ」

「ひゃう!」

「うわ、何するです!」

シルとサクミも捕まりもみくちやにされている。

「ねえねえ、お着替えしてみない? 服持ってきてるのよ。透さんに着せるために持ってきたのよ」

「ちよつと待て、なんで、僕に着せるために持ってきた服を詩瑠やティーや、朔美に着せるんだよ」

「そりゃ、女の子用の服だからに決まってるでしょ?」

何言ってるのコイツという顔で見られた。それはこっちだよ。こち。

「つまり、女の子の服を僕に着せようとしてたのか」

「そつよ……………あ」

「あ、じゃねえよ、あじゃ!」

何でいつもこいつも、僕に女装させたがるんだよ！！やるほうはたまったもんじゃないよ！あ？なんだって？そんなこと言いつつも楽しんでるんだろって？そんなわけないだろうが！！こちとら、死にそうになるんだよ！！

「……………それなら、これ、使える」

ティーがかつらなど、この前捨てたはずの女装セットを母さんに渡した。こいつ、隠し持ってたな！！

「あら、いいもの持ってるじゃない。よし、なら、透さんにもしましようか」

「は！？」

「あたしは賛成だ！」

エミが僕の腕を押さえて言う。こら、離せ！

「離せ絵美！菊、絵美を何とかしてくれ！！」

「すみません」

キクは僕の足を押さえる。お前もか！！って、これじゃ、この前と同じじゃねえか！何とか振りほどいて……………って、動けねえ！！何でだ？

足が凍っていた。

「桃香！！」

「見たいから」

母さんの前で能力使つなよ！てか、これじゃ逃げられねえ。ラ

イは、当然役に立たないだろうし。

「なんや、ものすごい不名誉なこと思われとる気がするんやが」

「気のせいだろう」

「そか、まあ、うちは新参者やから、見てみたいな」

ほらね、役に立たない。って、あれ、美鈴メイリンはどこ行つた？ 首だけしか、動かせないので、首だけを動かして探す。いた、庭で構えている。

美鈴メイリンは父さんとなぜか、知らないけど戦っていた。人間業じゃない動きをしながら。それについていつてる父さんっていったい。いや、考えないでおこう。
アレは、ただの変態だ。

「あらあら、美鈴メイリンちゃんは、拳法家なのね」

母さんが外の光景を見て言った。

「あれ、止めなくていいの？」

美鈴メイリンは大丈夫と思うが、万が一ということがある。父さん、いや、変態はどうでもいいけど、美鈴メイリンが心配だ。

「大丈夫よ。お父さん変態だから」

ああ、母さんの中でも変態は変態認定されているのか。いつもどんな生活しているのかもろわかりだな。そして母さんの言ったことは正しかった。動きにはついていつているが変態の方が負けていた。まあ、人間とモノじゃ格が違うのだろう。

「さてと、じゃあ、みんな行くわよ」

って、しまった！ 忘れてた、この状況！ まずい、何とか……無理、逃げられない。ああ、なんだよ。この前まで、かなりシリ阿斯だったじゃん……なのに、終わった途端これってどういうことだよ……。

心の叫び虚しく、僕は良い様ににされてしまった。

・
・
・

結果、物凄い美少女がいた。以上。それ以外に語ることはない。語りたくない、語らせるな。………わかった、話が進まないから語る。そこには、女装させられた僕がいた。かつらをかぶらされてフリフリのついたふわふわした服を着させられている以上。これ以上は僕の精神が保たない。そうだ、今なら、本気で死ねる。この前もやばかったが、これも相当だ。しかも、見るみんなの視線が痛い。死ねる。絶対に死ねる。唯一の救いは、変態が外で戦っていることだけだ。

「死にたい」

いつの間にか取り付けられた変声機によって女みたいなの、というかマジで女の声が出る。ああ、死にたい。誰か、僕を殺してくれ。だれでもいい。楽に殺してくれるなら変態でもいい。ああ、変態はだめだ。絶対何かされる。

「あらあら、透ちゃん、そんなこと言っちゃだめよ。可愛いんだから」

それが嫌だから言ってるんだよ。てか、ちゃんって呼ぶなちゃん

って！

「さてと、準備も出来たし、行きましようか」

「良くってどこへ？」

「旅行よ」

もしかして、母上様、このまま旅行に行くんですか？

第二十五話 旅行道中川の音

僕は本当に女装したまま旅行に連れ出されてしまった。なぜか、モノたちも全員一緒にだ。変態がみんな一緒がいいだろうと言って車を用意した。僕達望月一家とティーが同じ車で、あとがもう一台だ。なぜ、ティーかといえば母さんが気に入ったからだ。

ちなみにモノたちが乗った二台目はキクが運転している。あの中で唯一一年長者で運転できそうだったからだ。一時間前にマニュアルを読んだだけの運転である。そのわりにはしっかり運転できている。しかし、それでも無免許運転だ。普通なら捕まる。

捕まらないのはここが望月の敷地だったりするからだ。僕も初めて知ったのだが、変態の事業が成功して、財産がかなり膨れ上がったのだ。そのため、望月の敷地が増えたのだ。なぜ、知らなかったのかといえば、望月の記事を意図的に僕が避けていたからなのだが。

まあ、まさかこんなことになっているとは思わなかった。

「なんで、道路買ってるんだよ」

「こんなことになると思っていたからだ」

変態がかっこつけながら言った。まったくかっこよくないが。それに絶対嘘だろ。絶対面白くて作ったんだ。それで利用価値がなかったけど、これでようやく利用できて嬉しいんだ。

「あらあら。それなら、あれもいつか使うの？」

「あれ？ は！？ まさか、見たのか？」

ん？ なんだ？ 変態が母さんに何か言われて慌ててるぞ。なにがあったのか？ 会話の内容だけじゃよくわからないな。ティーに

聞いて見るか。こいつ心読めるし。

「なあ、何のことかわかるか？」

「……………」

ティーが目を瞑って何かを聞くように耳をそばだてている。これで心の声を聞いているんだろうな。

「……………聞かないほうが身のため」

いったい何をやったんだあの変態は！！ やめた考えるのやめよう。そうだ、やめよう。ティーが言ってるんだ。それは本当に絶対に聞かないほうがいいんだろう。聞いてたまるか。とりあえず、変態にはあとで肅清を加えておこう。

しばらくは何事もなく、旅行は進んでいった。なんたつて車はこの二台しかないのだ。何か起きたほうが異常だ。だが、それは間違いだっただようで……………。

「すまん、ガソリン切れだ」

変態の謝罪に蹴りで答える。山の真っ只中でなんとガソリンがなくなっただけなんです。この変態屑野郎にどうやって落とし前つけさせようか。

「この体勢ならパンツが——あんなべら!？」

そうだった、今僕女装だったんだな。うん、慣れたもんですっかり忘れてたよ。忘れなくなっただけ。見られても構わんがこいつにだけは嫌だ。殺したくなる。

「で、どうするんだ？」

「大丈夫よ、待ってれば助けが来るから」

母さんがいうのなら本当に来るんだろう。助かったよ。しかし、綺麗なおとこだ。車の中だったからよく景色を見てなかったが、緑が綺麗な場所だ。水の流れる音が聞こえるから、どこかに川でもあるのかもしれない。

「……………水の音」

ティーも感じたらしい。まあ、耳がいいから僕よりも聞こえてるから当然だな。しかも、何か行きたいみたいだし。

「母さん、近くに川があるみたいだから言ってきたいいかな？」

「いいわよ。私は変態と待ってるから。みんなで言ってきたさい。終わったら電話するわ」

「わかった。みんな、行くぞ」

みんなで近くにあると思われる川へと向かった。

第二十五話 旅行道中川の音（後書き）

はい、どうもテイクです。

来週から一週間ほど、用事で出掛けるので執筆が一切出来ないため、二週間ほど更新できなくなります。

ので来週と再来週の更新はお休みしたいと思います。

間章5（前書き）

再び鬼畜外道登場。

前よりは鬼畜でないはずですよ。たぶん……………。

間章 5

「ヒヤハハハハハ！！」

少年が鑢が退きつめられた床に女の顔を押さえつけ、原付に乗りそのまま引き摺っている。女は走っていくたびに体が削れて行く。肉が削げ落ち、骨をあらわにし、神経繊維を裂き、脳に過剰な痛みを伝達する。

女は痛みで気絶しても、すぐにまた痛みで意識を引き戻される。それも、すぐに痛みで意識を切断される。何度も何度も続く、永遠ともいえる連鎖。しかし、それもすぐに終わる。

女の体感時間で永遠とも思えた時間はたった一分にも満たない時間で、女は絶命した。

「あゝ？ なんだもう死んだのかよ。もっとたのしませろっての
つたくよお」

「坊ちやま。もう、戦力は十分なのですか？ なんならまだ手配で
きますが」

「ああ？ 十分だよバァーカア！！ あんま俺様に指図すつとぶつ
殺すぞお！」

「……………わかりました」

執事はさつさと部屋を出て行く。

「ねえ、マスター」

艶っぽい声で金髪赤眼の少女が少年に言う。

「私暇わたくし。ねえ」

金髪の少女が少年に顔を近づけながら言う。

「相手の所に遊びにいつでも構わない？」

「そうだなあ。まあ、いいんじゃない？ てめえが消えて良いならなあ」

「もう、いじわるねえ」

「ん、でもそうだなあ、遊びに行く位ならいいだろうぜえ」

少年がそう言って執事を呼び、旅行をすることを伝える。執事は少年が何をするつもりなのか察した。

「ですが、それは……」

「ああん？ 俺様が言ってる事が聞けねえのかああん？」

「し、しかし」

「てめえに指図される気なんかねえ。やれ」

少年が金髪の少女に命令を下さず。

「了解よマスター」

「がはっ！」

金髪の少女が執事の首を掴み持ち上げる。少女の細腕では到底持ち上げることが出来ないはずの老執事の体は宙に完全に浮いていた。まるで、人形ドールのように金髪の少女の手の中で、執事は弄ばれていた。

「ねえ、どうやって殺して欲しいの？ ねえ、ねえ、ねえ？ ほら、早く答えなさいよ、じゃないと、私わたくしが無惨で、惨くて、残忍な殺し方をしてあげるわえよ」

「ぐああ、くう、かつ！？」

執事の首がへし折れるギリギリの力で金髪の少女は締め上げる。笑いながら、残忍にそして、死なないように息が続くように、ギリギリで力を緩めたり、すぐに締めたり。遊び、彼女にとってはそれも遊び。楽しい楽しい遊びだ。

しかし、それもすぐにツマンナクなる。抵抗も出来ないのだ。この執事は護衛も兼ねているので平凡普通な人間とは違いそれなりに鍛えてあるはずであった。それなのに、金髪の少女の力に抵抗すら出来ないのだ。ツマラナイのも当たり前だろう。自分よりも遥かに長生きした執事が、まるで子供にしか感じられないのだから。

「もういいやあゝ、ねえ、生きたまま首を反対にしてみよつか？」

返答を聞くまえに金髪の少女は、首を掴んだまま、執事の頭をあのいている左手で掴み、無造作にひねる。

こきゅという音が響き、執事の顔は180°逆を向いていた。それでも幸か不幸か執事は生きていた。自分で自分の背中を見下ろすというレアな経験を体験してた。常人ならばショック死をしているだろう光景だ。それでも執事は生きていた。

「アハハ、ねえ、どんな感じい？　ねえ、自分の背中を見るってどんな感じい？」

執事は答えられない。下手に体を動かしたら最後、ベッドから動けぬ体になるのは必須だ。まあ、どの道、ここから生きて帰れたらなの話であるが。

「ほおらあ、もっとまわしてみようよお、ねえ！」

こきゅ、今度こそ、何かが捻じ切れた。執事はそれ以降動かなく

なった。力が抜け、だらりと手足が垂れ下がる。

「あら？ もう死んだの？ ツマンナイなあ、ほら、あんたあと
は好きにしていいいですよ」

ぽいつと、ゴミを投げるが如く、執事を佇んでいた紫髪の少女に
ほおる。

「グチャグチャニシテイイノ？」

「ええ」

「ソウ」

紫髪の少女はまず、執事の指を一本一本捻じ切っていく。既に事
切れている執事は悲鳴を上げることはない。ただ、捻じ切れた指か
らは今だ血が流れ出る。体が、その血で赤く汚れていくが、紫髪の
少女は気にしない。むしろそれを楽しんですらいるように見える。
無表情で顔にまったく変化はないのだが。

手の指を全て捻じ切った後は、足の指。それも捻じ切り終わると、
腕を引き千切る。それを細かく砕いていく。そして、全て潰したあ
とは、腹に指を突き刺し、無理矢理腹を、腹膜を引き裂いく。内臓
がその姿をあらわす。大腸を掴み外に引っ張り出す。それを掴み、
執事を振り回す。部屋に血の雨が降る。少女たちも、少年も気にせ
ず、血の雨を浴びていた。

遠心力に耐え切れず大腸が引き千切れ、執事の体が宙を舞う。そ
のまま窓から外へ落ちてしまった。紫髪の少女はおもちゃがなくな
ったような子供の顔をしていた。だが、すぐに近くにあった、出来
損ないの少女の残骸に歩み寄り、それで遊び始めた。

何がしたいのか。いったいこんなことをして何になるのか。意味
がわからない。本当に意味がわからない。

「さあて、邪魔者は消えたな。さあ、遊びに行くぜ。まあ、その時
に対戦相手と偶然かち合つて騒ぎになつても、まあ、仕方ねえよな
あ」

少年と五人の少女は、部屋を出て行つた。

間章5（後書き）

鬼畜外道君の名前募集中。素敵な名前を考えてやってください。

第二十六話 寄り道、川遊び（前書き）

お待たせしました！

PC復旧後、執筆意欲増加により、予定変更で更新です！

第二十六話 寄り道、川遊び

音のする方へ進むと、雄大な滝を持った川があった。夏の暑さは厳しいがここだけ、温度が低く感じる。水は澄んでいて川底がよく見える。魚もいるようだ。ここでキャンプも出来るんじゃないだろうか。川辺は砂利が敷き詰められているから、ちょっと離れたほうがいいと思うけど。

「いいところだな」

「……………綺麗」

「おお、綺麗じゃねえか。そこらへんの木とか燃やしてキャンプファイヤーやろっぜ」

エミが炎を出す。

「ここら、やめい」

「そうですよ。せつかくの自然が台無しです」

キクがエミをたしなめる。しぶしぶエミが炎をしまつ。まったくここで山火事なんて起こされてたまるか。

「お兄ちゃんー！」

シルに呼ばれたのでそちらを見ると、シルが川に飛び込んでいた。

「つめたーい！」

何か言おうかと思ったが、楽しそうだからやめた。邪魔するのは野暮だろう。そういう自分も入りたいのだが、さて、この格好だと

ここに人の目があるかわからない以上、うかつなことはしないほうがいいだろう。裸足になって足くらいはつけよう。

そう思い、裸足になり川に足をつける。ひんやりとした水が心地よい。

「ナイス！」

変態が水の中に居た。どこで用意したのか酸素ボンベまで用意して。

「死ね」

秘技を使い酸素ボンベを全て抜いた。変態は沈んでいった。ふう、これで静かになった。さあ、楽しもう。

「つて、冷たっ！！」

何！？ 何でこんな冷たいの！？ 足を抜いて周りを見る。その理由がわかりました。

「桃香何をやってるんだ——っ！？」

トウカが水につかっていた。それだけ。外見的にはそれだけだが、僕には見えている。トウカの周囲が凍っていることを。能力使って水を冷たくしている。そして、裸でした。思いつきり顔を背けたから首が痛い。

「暑い」

いや、暑いからって能力使って冷やすなよ。入ってるだけで十分

だよ。十分冷たいよ。それに裸でやるなよ。いや、水着とか買っちゃってないけど、それでも裸はないって。僕男ですよ？

「透なら、別に構わない」

いや、トウカが構わなくても僕が構うのですよ。

「シルも！！」

「こらこら、行けませんよ。人前そう、裸になつては」

服を脱ぎそうになったシルをキクが止める。

おお、キクよくやった。本当にキクは常識がわかってる。他の奴も見習って欲しいと周りを見回した。うん、それが良くなかった。

「ぶはあ！！ ええええ、エミ！！！！ おおおお、お前は何をやってんだ！！！！」

「何って水浴び」

うん、わかってるよ。それはわかってるよ。僕が聞きたいのは何で裸なんだよってことだよ。なんだよ

今回は裸祭りなのか。作者は何を考えてるんだよ。何も考えてない？ ふざけるなよ。何か考えておけよ。ただ、裸出したらアクセス数稼げるとか思ってるんじゃないかな。なに？ 思っていない？ じゃあ、何でだよ。…………… ふざけるなよ！！ なんで僕を困らせるつもりだけで、こんなことすんなよ。

「あの透さん？ どうかしたんですか？」

「は！？ い、いやなんでもない」

いかにいかに、なんかよくわからん電波（仮）を受信していた。

まずい変人になるところだったぞ。気をしっかり持たなければ。このまま作者の術中にはまってるものか。

その後、何とかガソリンを補充し再び、目的地に向かって、車を走らせた。

第二十七話 接近中

二時間ほど走り続け、我ら一行は目的地へとたどり着いた。どういうわけか、嫌な予感しかない古い旅館だ。ここもうちが所有しているらしい。物凄く安く買えたと母さんに聞いた。その時点でもう、嫌な予感しかない。しかも、まだ女装中。マジで何か起こりそうで怖い。いや、別に幽霊が怖いとかじゃないんだが、もとより家には妖怪みたいなのがいっぱい居るし。

だが、今回同行しているのは変態だ。そう、この変態が怪しいんだ。ここに来てからそわそわしてるし。というか何で変態が一人部屋で、僕はその他みんなと同じ部屋なんだよ。おかしいだろ明らかに。いや、変態と同じ部屋は嫌だが。それでも、もう何部屋か用意しろよ。聞いたらなんだか知らないが、団体客が占拠しているらしい。恨むぞこんちきしょう。

「透さんなんだか不機嫌そうですね」

母さんが言う。

この人はわかってて言ってるだろ。僕の不機嫌な理由も完全にかつてるだろ。それなのに聞いてくる。はあ、まったくこの人は。

「さあ、風呂行くぞ!!」

変態が乱入してきた。

「流星裂破無明脚!!」

「あびば〜!？」

なんだかよくわからない技が発動し変態が吹き飛んだ。そのまま、

扉を突き破り廊下まで吹き飛んだ。なんなんだろうか、この技は。つて、しまった、他にも客いるんだった！！

慌てて廊下に出ると、同年代の少年一人となんか、アニメみたいな髪色をした少女五人の六人の団体に変態が突っ込んでいた。

何か、親近感が湧くのだがなぜだろうか。ただ、とても嫌な感じがする。こいつらには関わらないほうがいい。なぜか、そう思った。

「すみません、うちのバカが」

「いや、いいよ」

「ねえ、早く行きましようよ」

「わかってるさ、じゃあ、また」

そう言つてその少年たちは立ち去つていった。

「あれ、またつて、何だ？」

まあ、良いか。とりあえず、このままこの変態をここにおいておくのが危険だ。縄でぐるぐるに縛つて更に毛布でぐるぐるに縛つて、更に更に、縛つてと。よし、これくらいしていれば出てこれないだろう。これで少しは静かになるはずだ。それと、そろそろ女装をやめよう。服はもうとくに乾いているんだから。

*** side?????

クフフフ、あれが相手か。まったく女装とは笑いを堪えるのに苦労させてくれる。クク、クハハハハハハ。

「マツタクガマンデキテナイ」

おっと、これじゃ変態だな。気をつけねえと。さあて、これから、

あいつら風呂みたいだな。ククク、これは好都合だ。さあ、て、せいぜい遊ばせてもらうぜ。

「さて、行くぞお前ら。ククク、風呂だ風呂」

風呂へと俺たちは向かった。

*** side out

というわけでようやく普通の服装に戻れた僕と母さんと変態を除いたいつものモノメンバーは現在進行形で風呂に向かっていた。母さんが変態を見張ってくれているのでノビノビと入れるだろう。母さんにはあとで感謝しないとな。

「しかし、温泉なんて久しぶりだな」

中学は行ってから行ってないから、三年ぶりかな。うん、まあ変態に連れてこられた時はいやだったが、楽しくなって来たな。

「ねえ、お兄ちゃん、温泉って何？」

シルが聞いてくる。

「あたしも知りたいぜ。なあ」

「私は知ってますから、私に言わないでくださいよ。エミさん」

エミは知らない、キクは知っている。

「……………ワタシ知ってる」

「うちも同じくやで」

ティーとライも知ってるんだな。

「知らない」

「知らんアル」

トウカと美鈴^{メイリン}も知らないんだな。よし、じゃあ、説明しておくか。

・
・
・

五分くらいの温泉の説明を終える。いや、手抜きじゃない。温泉の説明している描写が面倒だったとかそんなんじゃないはずだ。そんなわけで温泉。

第二十七話 接近中（後書き）

新年一発目の更新です。

皆様あけましておめでとうございます。

今年もよろしく願います。

さて、挨拶も終わったので連絡を。

次回の更新は十六日を予定しています。

ので、皆さんお楽しみに。

それではまた。

第二十八話 温泉

「ふう、良い湯だった」

僕はマツサージ椅子に座りながらくつろいでいた。

は？ 何でもう、あがつてるんだって？ きちんと描写しろって？ いや、男の風呂を見て何が楽しいんだよ。何、違う？ あいつらの風呂の描写を書けって？

まあ待て、あせるなよ。焦ったら良いことないって作者が言ってる。この後きちんとやるはずだから、というか期待するなよ。何も無いから。というか、普通に風呂はいるだけなんだから、何も無いぞ。あるほうがおかしい。まあ、変な音が響いていた気がするが、それだけだ。何もそんなお前たちが期待するようなことはなかったと思うぞ。それでも見たいのか？

わかった、お前たちの意思は固いらしい。どうなっても知らないからな。ふう、って、何で僕がこんなものを読まなきゃいけないんだよ。

「主人公だから」

お前誰？

「神」

は？

「それでは、始まり始まり」

ちょっと待ておい。というか、こういうのって普通前書きとかだ

ろー。

***side三人称。

キクたちが大浴場に入ってきた。大理石で作られた無駄に高級感あふれる風呂である。近くの源泉から温泉を引いているので、中々な湯であることが予想できる。

「うわゝ、すごいねゝ。家のお風呂より広いよゝ」

はしゃぐシルが言う。そのまま走って浴槽に飛び込みそうな勢いであつた。それをキクがとめる。

「駄目ですよ。まずは、体を洗わないと、最低限のマナーです」

「えへへ、そっかゝ」

そのまま浴槽に入ろうとしたトウカがそれを聞いて誰にも気づかれないように動きを止めて、自然な動作で体を洗いに行った。若干いつもの無表情が赤くなっている。

そこら辺を詳しく描写すると面倒なことになるのでカット。見たいと言われても無理ですので、悪しからず。というわけで全員、湯船に浸かる。

『ふうゝ』

ゆるゝい声のハミング。

「ふえゝ、気持ちいいねえ、まったく。少しぬるい気がするけどよ」

「エミおねえちゃん、間違っても炎は出さないでよね」

「そうですよ。ただでさえ、わたしたちにとっては熱いんですから」

シルとサクミがエミを嗜める。

「わかってるよ」

「じゃあ、冷やす？」

「いや、トウカさん。それも駄目ですよ」

「キクの言うとおりアル。他の人も来るアルから。きちんとしないと駄目アル」

氷を出しそうな勢いのトウカをキクと美鈴^{メイリン}が止める。

「よっしゃ、サウナ行くでティー」

「……………いや」

「そうか、そうか。行きたいか」

「……………ちが」

「わかつとるで、めっちゃ熱いととこやな！！」

「……………」

ライにティーが強引にサウナへと連れて行かれた。ライはまったく話を聞かないで、強引に連れ出したので、サウナに入った途端、ティーに殴られていた。そんな様子をキクたちは微笑ましげに見ていた。殴ったティーだが、どうやら、サウナを気に入ったようで、満喫していた。

「ふう、しかし、たまにはこういうことも楽しいですね」

キクが呟く。

「そうだなあ。で、透は今頃何してんだろっな？」

「隣でお風呂入っているはずですよ」

「見に行くか」

「無理でしょエミ」

そんな話をしていると、新たな女性客の一団がやって来た。それは、先程、透が変態を蹴り飛ばした時に遭遇したアニメ色の髪をした集団だった。それは、キクたちにも言えるのでキクたちは気にしなかった。ただ、おかしい気配を感じていた。何か、自分たちを同じような。

キクたちはそれが何だか図りかねていた。

「あら、その小娘は気がついたようですわねえ」

そのとき、金髪の少女が言った。ティーが金髪の少女を睨みつけている。敵意を込めて。

「おいおい、ティーどうしたんだ？」

「……………敵」

「何？」

エミが動く前に、紫髪の少女が動いていた。サクミとっさに飛び出し、紫髪の少女を抑える。

「うぐ、な！！ わたしよりも力が強い！？」

「センタクバサミゴトキガワタシニカテルワケガナイ」

紫髪の少女と、サクミが膠着状態になる。

「おい、てめえら！」

エミがそれに加勢しようとしに動くといきなり目の前に猫のよう

な雰囲気のある赤髪の少女が現れた。

「!?!?」

「ニヤハハハ、あんたの相手はうち」

その状況を見たキク、シル、トウカが動く。

「助けを呼ぶべき」

「そうだね」

キクと、シルそれとトウカが風呂から上がり、助けを呼ぶために外に出ようとすると目の前にコバルトブルーの髪の少女が立ちふさがる。

「……………行かせない」

それをサウナから出て物陰から見ているティーとライ。

「あちゃ〜これはまずいで、どないする」

「……………キヤラ被り、それより、後ろ」

「へ?」

閃光が煌めいた。

「どあああ!?!」

慌てて避けるライ。

「危ないな!?!」

「うるさいわね!?! 騒ぐな! 私はどうでもいいのに連れ出され

「て切れてんのよー!!」

茶髪ショートヘアの少女が二人の後ろに立っていた。

「あらあら、楽しいことになってきたわねえ。ねえ、天井に入る居
ている奴もそう思わないい」

金髪の少女が天井に張り付いていた美鈴メイリンに言った。美鈴メイリンが飛び降りてくる。

「……………気がつかれたアルか」

「そんなに殺気がでてればねえ」

「そうでアルか」

「さあ、遊びましょう」

風呂場で突然の乱入者との遊びが始まった。

第二十八話 温泉（後書き）

今回なんかやりすぎた感があるようなないような。
な、ないよね？ 大丈夫だよな？

第二十九話 サクミ戦う

紫髪の少女がわたしを掴んだまま持ち上げる。そして、そのまま浴槽に投げ込んだ。落ちた衝撃の水柱が天井にまで届いた。紫髪の少女は力を抜いてゆっくりと浴槽に近づいていく。

ざばあとわたしは湯から出る。目の前には紫髪の女。力では勝てそうにない。唯一の自慢だった元が違うようです。それでも、諦めるという選択はわたしにはないです。透に無事な姿で会わなければこの旅行が台無しになるのだから。

「よくもやってくれたですね」

「ミズニナゲタカラブジ？」

「実力ですよ」

「ソウ、ナラマダ、アソベル」

それだけは勘弁してほしいですよ。だって、勝ち目なさそうなんですよ。でもまあ、頭はわたしの方がよさそうなので、何とかなるかもしれません。まあ、何とかするんですけどね。

「わたしは勘弁してほしいですねっ！！」

お返しとばかりにその無駄にウェーブのかかった目がちかちかする紫色の髪を掴んで湯船に叩き込む。おお、軽い。まあ、わたしも人のこと言えないほど軽いんですけどねっ！！

ザバーンと大きな音を立てて紫の少女ええい、面倒なので紫です。紫が湯船に沈ん見ました。その間にわたしは上がります。結構あの湯船って深いんですよ。本当にどうしてこれくらい深いのかってくらい深いんです。

おそらく紫も足は着かないはずですよ。わたしも足つきませんでし

たからね。だから、泳げない奴は沈みます。あの紫は泳げないような気がしたので。沈めてみました。これでうまくいけば終わりですけど。

「まあ、そうは行きませんよね」

妖怪のごとくあがってきました。いったいどうやってあがってきたのやら。後で見たのですが、どうやら、あれです、壁に指を刺して上がってきたそうです。怪力ワロタです。わたしもやれば出来るのでしょうか？ 洗濯バサミの仕事越えてますよねこれ。

「ヨクモヤツタナ」

「お返しですよ」

「ソウカ、ジャア、ワタシモ」

ふっ、そうはいかないのですよ低脳。跳びかかってくる紫。ただ、一直線に向かってくるだけではわたしを倒すことは出来ないということをお教えてやるです。

「目潰し!!」

「ギャアアアア」

何をやったかというかは、単純なことです。シャンプーを相手の目の中に入れただけです。うん、危険ですね。ちょっと、やりすぎた感がありますがわたしも死にたくはないので本気でやりたいと思いますよ。そのまま、目を押さえている紫の足を浮かんで、ぶん投げた。落としたのは水風呂。なんとなくあの紫は暑さに強そうだったので。

「ヒャアアアアア」

「計画通り」

うん、効いてますね。しかもあの水風呂も冗談みたいに深いですから、また、あがって来るのに時間がかかるはずです。

「……………」

あれ、おかしいですね、あがってきません。

「……………も、もしかして、やってしまいました？」

や、やばいですよ。こんなところで、どげえもんなんて洒落になりませんって！ あ、よかった浮かんできたって、はい、意識ないですー！！

「や、やばー！！」

さっきまで、なぜか戦っていた紫を慌てて引き上げる。見てみると、気絶してるだけみたいです。ふう、よかった。下手をすれば心臓麻痺ですよ。まあ、いいですか。勝ったのでよしとしましょう。さてと、ほかの人は大丈夫でしょうか。

第三十話 エミ戦う？

sideエミ

「ニヤハハハハ、さあ、行くよ！」

どうにかサクミの援護に行きたいんだが、どうやらあたしの相手はこいつらしい。さつき風呂に投げ込まれていたが、まあ、あいつなら大丈夫だろう。あそこ深いけど、あいつ泳げるし。問題はあたしだな。こいつ、気味悪いんだよな。なんか嫌な予感がするな。油断は禁物だ。

「来い！！」

両手に炎を出して身構える。相手が何をしてきても何とかできるようにする。こいつの力はわからんが、まあ、透まで被害が行かないようにするだけだな。恩をあだで返すとかあたしの柄じゃないぜ。赤髪の少女が向かってくる。むう、面倒だから、こいつのことは赤猫と呼ぼう。なんか猫っぽいし。そして、やっぱり思ったとおり赤猫は猫っぽかった。動きが妙にしなやかで関節なんてないぜ的な動きをしてくる。正直気持ち悪い。こいついったい何なのやら。

とか思っていると、カポエイラの技ケイシャードを放ってきた。わからない奴はググレと言いたいが、説明してやる。顎への蹴りだ。それを紙一重でかわす。危ないぜ、喰らったら、脳震盪でも起こしかねん。

しかし、どこでカポエイラなんて覚えたんだこいつ。そして、あたしは何でカポエイラの技を知っているんだろうな。神の意思かしっかし、タオル一枚で戦いつてなんだかな。

無駄なことを考えていると、またもやケイシューダを放ってきた。

それかわす。フツ、見ていればかわせない攻撃ではない。なんて、かつこつけてみたりして。

「ニヤー、当たらんや〜！」

「こつちからも行くぜ〜！」

炎を伸ばして、剣のようにする。うん、透が持ってた漫画、なんか友達が押し付けたとか言ってたやつ読んで一度やってみたかったんだよ。なんだつけ、とあるなんとかって、まあ、うん、うまく出来た。さあ、行くぜ〜！！

「とおおおりやあああああ〜！！！」

炎剣をぶん回す。剣術なんて知らんから適当だ。まあ、元コンロのあたしが剣術なんて知ってたらおかしいだろう。だから、振り回すだけだ。

「ニヤハハ、当たらないよ〜」

む、やっぱあたねえな。かと言ってもうちよい、火力とかを挙げると、ここが燃えちまうんだよな。ほかの奴らも巻き込みまうし、スプリングラーに反応されたら困る。面倒は苦手なんだ。これも面倒だから、早く終わらせたい。楽しんでる風だったけど、実は結構面倒だったりする。どうする？ あゝ考えるのも面倒になって来た。さっさと、あいつ帰ってくれないかな。

「むむ、なんかやる気くない？」

「ああ？ ああ、ない。面倒になって来た。というか、炎出すの面倒なんだよな。なあ、帰らないか？」

だつてさ、あたしは元はコンロだぜ。いや、こういうバトル展開は好きなんだが、いざ自分がやるとなるとなんか面倒になって来た。やっぱ、こういうのは見るのが熱いよな。うん、実感した。

まあ、ほかの奴も大丈夫そうだし、こいつが帰ってくれば何の問題もないんだし。

「それもそうにや、うちも面倒嫌いやし。帰ろうか」

「おう、じゃな」

「じゃにや」

赤猫は本当に帰って行った。おお、マジで帰ったよ。もしかしてあたし、そういう交渉の才能でもあるんじゃないか？ まあ、良いやさてと、もう一風呂入ってくるかねえ。

「つて、あれ？ これで、あたしの出番終わり？ こんなんでよかったのかなおい」

第三十話 エミ戦つ？（後書き）

どうしてこうなった……

間章六（前書き）

1ヶ月お待たせしました。

これから復帰です。

これからもよろしく願います。

間章六

静か過ぎる。森が静かだ。完全に音がない。森の中で、これはありえない。風が吹けば必然、木々が揺れる音がする。動物が動けばそれなりの音がする。完全な無音などはありえない。なのに、無音の森の中に少年が立っている。ありえない景色。ありえない。ありえない。

「さあて、今頃あいつらは楽しんでんだろうなあ、ああ、俺も行きたいぜ。まあ、それは変態だから駄目だな。さあてと、おいじじい、出てきたらどうだあ？」

「ばれておったか」

森の木の裏から、源さんが出て来た。少年の前に出てきて、少年を睨みつける。

「何を考えておる。お主がやっておるのはルール違反じゃぞ？」

「ハッ！ 何だそんなことかよお。俺たちじゃあ、遊んでるだけだぞ。何か問題でもあんのかあ？」

ニヤニヤとしながら言う少年。わかってんだよ。そんなことは。俺は面白ければそんだけでいいんだよ。どうせ、代わりになる奴ならいるんだからなあ。そう、少年の表情は語っていた。

今まさに、旅館の風呂場では少年が遊びと称する戦いが起きている。源さんの力で、誰にもバレないようにしている。普通ならば、処罰せねばならぬ事項ではあるが、少年が言うとおり、これは遊びでしかない。本来の戦いは両者の合意でのみ始まり、その中でのみ、ルールが適応されるのだから。

一方が一方的に行う攻撃は普通は反則である。だが、一方が攻撃

を認知しておらず、さらに、それが、相手の主人にバレなければ、反則にはならない。戦っている彼女たちは、透にはバラすことはない。つまり、これは本当に遊びでしかない。一歩間違えれば己が滅ぶ危険な遊びだ。

「なんとも、危険なことをする」

「ハッ！ 危険？ この程度で？ フツ、フハハハハハハ！ この程度危険ですらない。じじい、てめえが言う危険と俺様が言う危険はレベルが違うんだよ、ばあかあ！！ ハハハハハ」

「ならば警告しておこう。その慢心がいずれ己を滅ぼすことになるぞ」

「ハッ！ させてみな。じゃな、じじい、ハハハハハハハハハハ！！」

少年は立ち去っていった。その途端、関を切ったかのように森の中に音が戻って来た。少年の異質な気配に森の全てが逃げ出していた。源さんが思うのは圧倒的危険。あの少年はいずれ、全てを破壊してしまうだろう。そんな予感。

「すまんの、わしには止められなかったわ」

源さんは呟き森の中に消えた。後には、何も残らなかった。

少年の目の前には熊がいた。野生の熊。飢えているのは少年に向かってうなっている。

それだというのに、少年はまったく隙だらけ。襲ってくださいと言っても言う風に、熊など眼中にないとい風に立っている。

「ハッ、おもしれえ、あのじじい、いつか俺が殺してやるよ」
『ガアア！！』

熊が少年に跳びかかる。その爪にかかれば、少年など一瞬のうちに切り刻んで胃袋の中に入れてしまうことが出来たはずだった。そう、はずだったのだ。実際はそんなことにはならなかった。そんな空気にさえさせてはもらえなかった。

「あゝ！」

一睨み、たったそれだけ、それだけで、熊は逃げ出した。この森の中で最強を誇っていた熊であったが、少年が睨むだけで、おびえ、逃げ出した。

「フン、さて、戻るか。フツ、ハハハハハハ！」

少年は、旅館へと歩を向けた。

第三十一話 キク、シル、戦っちゃいました

sideキク

コバルトブルーの髪の女の子が目の前に立ちふさがっています。さて、どうしたものでしょうか。助けを呼ばないと色々と大変なことになるますし。透さんにも迷惑をかけてしまいます。シルも巻き込むわけにはいきませんし、さて、どうしましょう？ あ、トウカさんは早々とどこかへ行つてしまいました。どこへ行ったのかわかりませんが、おそらくは大丈夫のはず。

ほかの方々も勝手にやるでしょうから、私たちは目の前のこの女の子を何とかしましょう。話を通じるなら、それでいいんですけど。通じませんよね。あちこちで戦つてみたいですから、駄目でしょうね。

さてと、私達も見詰め合つてゐる場合ではないですね。

「ねえ、キクおねえちゃん、どうするの？」

「どうするも何も、とりあえず、私が相手をひきつけるので、その間に助けを、呼んできてもらえますか」

「うん、わかった」

さてと、まずはどうしましょうか。とりあえず、この女の子と話をしてみないとわかりません。

「あなたどうしても、私たちを通す気はありませんか？」

「……………言われた、誰も、出すな……………て」

「そうですか」

見たところ何もしなければ戦闘の意思はないようですね。でも、

おそらく、出ようとしたら戦うことになりそうですね。家事は得意ですが、戦いはあまり得意ではありません。シルはもっと得意じゃないはず、シルだけでも逃がさないと。助け云々の前に私たちは、無事に帰らないといけないので。ほかの人たちは、大丈夫みたいです。すね。いつも暴れてるだけです。

「わかりました。シル。私が良いと言ったら走って外に出てください。着替えてから、良いですね、きちんと着替えてから、外に出てください」

大事なことから、二回言います。でないと、この子裸のまま外に出そうでしたから。

「うん、わかった」

これでいいわね。さてと、やりましょう。

「……………」

「行きますよ」

女の子に私は走ります。あ、良い子はまねしないでください。とても、危険ですから。風呂場で走るのは転倒の危険がありますから。頭部を強打し、脳震盪、脳出血、意識不明、最悪死に至ります。

アイコンタクトでシルに合図を送り、シルも駆け出す。二人同時に動いたのを見て、女の子がどちらを止めるべきか悩みます。その隙に私は女の子を羽交い絞めにする。

その間にシルはしっかりと脱出。これで何とかなるでしょう。

「……………逃げられた……………私怒られる？」

「大丈夫じゃないですか？ 私なら怒りませんよ」

「……………そう、じゃあ、あなた、ツブス」

どうして、そんな思考になるのでしょうか。言葉も途切れ途切れで、聞き取りにくいです。でも、とりあえずは少しでも相手をしてほしい。時間稼ぎとも言いますが、シルが戻ってくるまでの間、彼女をここに足止めをします。他の方も忙しそうですから、応援は望めません。だから、少しでも本気を出しましょう。

箒を取り出す。

「行きますよ」

突っ込んでくる女の子。その足に向けて箒を振る。あまり傷つけないでください。幸いここはお風呂です。他の場所よりも滑りやすいことこの上ない。ならば、足を払えば簡単にこける。

「……………む」

予想通り、女の子が滑ってこける。追撃はしません。私の役目はあくまでシルが誰かを呼んでくるまでの時間稼ぎ、一般人の前ではこの人たちも何もできないはずでしょうから。

「さあ、あと何回床に這い蹲りたいですか？」

第三十二話 ライとティー放つ

sideライ

「あゝ！！ もう！！ さつさと当たりなさいよ！！」
「当たったら死ぬわボケエー！！」

さつきから、茶髪がなんだがようわからんもんを打ってきおる。
なんなんやあれは。当たったらただじゃすまんでありや。しかも、
その身一つでやるってもうあぶなすぎや。うちは平和を愛する市民
やで。まったく、こんな荒事は、ばっち来いやで！ おもろなつて
きたわ。まあ、相手の弾幕なんぞ、うちが抱えたティーがおるかぎ
りあたらずへん。このちみっ子本当に役立つわ。しかし、あれやなこ
の風呂マジで広いわ。露天風呂まであるんやから。まあ、そのおか
げでにげれとるんやけど。

「……無駄なこと思ってる暇があるなら、早く何とかする。右に回
避」

「あいよー！」

「ああ、もう！！ 何で当たらないのよ！！」

このちみっ子のおかげやで。あはは、見ろあいつがバカのようだ
！ ごめん、ム。力なんてうちには無理やったんや。しっかし、あ
れは何をうつとるんやろな。かなり威力あるからそうとうなもんや
と主運やけど。

「なあ、なんやわからへんか？」

「……………あいつの声うるさすぎてわからない」

うん？ ああ、あいつ騒いどるからなあ。こいつは特に耳いいから、余計堪えるにやるな。まあ、それはしゃあない。そろそろこっちも反撃しよか思うとるにやけどどうしよか？

「……………ネコ、なぜ？ 好きにすればいい。左に回避」

「ほいよ！」

「キー、だからなんで当たらないのよ！ 当たりなさいよ！」

当たってやるわけにはいかんのや。そもそも、当たりとうないかなあ。うん、当たったら死ぬわ。ティーだったら粉々になるんじゃないか？ うん、平和主義のうちからしたら大歓迎やけど。

「……………死にたい？」

「それは勘弁や」

「……………それより攻撃したら」

「おお、そうやったな。行くで」

「……………跳んで」

「おおあ！ 攻撃しようとしたらこれかいな！」

「アレを避けるなんて、あんた何かしてんの。まあいいわ、さつさと当たって楽になりなさいよー！！」

だからそれは嫌や言うとのに。それに、ティーの能力つかつとるのばれかけとる。うゝん、仕方ないなあ、ここはうちの能力を使つてさつさと退散してもらいましょ。ティーの能力はかなり使えるからな。まだほかんもんに教える気はさらさらないで。さあ、反撃や。

茶髪に向き直る。

「こっちから行くで！！」

光を圧縮して放つ。うん、簡単に言えばレーザーや。うち能力は光を放つことや。ある程度圧縮したり拡散したり出来る。これに当たれば痛いじゃすまさへん！

「ちっ！」

あ、かわされた。まさかわされるとは思わなかったわ。こなくそ、絶対当てたで！　って、あたへん！！　どないして！？　ええい、ちょこまか動きよってからに。胸か、胸がないからそんなに早いんか。茶髪は本当に絶壁やからな。あ、これ言ったらあいつに殺されそうや。他にもうちの連中にもやな。

「……………左に撃って」

「うん？　そこに撃てばええんか？」

「うん」

「ハイダラー！！！！」

「うきやー！？」

お、直撃したわ。なんか吹っ飛んで行ったし、これでオーケやな。ふう、疲れたで。人一人抱えて走るのって結構きつい。ちょうど温泉に入ればいいや。

「ふいゝ」

「……………はあゝ」

温泉に浸かる。ふいゝ、もう気持ちがいい。あ、あいつらは大丈夫なんやろか。まあ、ええか。

第三十二話 ライとティー放つ（後書き）

相変わらず残念戦闘描写で申し訳ないです。

次回はもろもろの事情により更新はお休みです。再来週にまた会いましょう。

第三十三話 美鈴の戦い

side 三人称

美鈴^{メイリン}は目の前の金髪の女を警戒していた。目の前の女はここに入ってきた、美鈴^{メイリン}たちを襲った者たちの中で飛び切り異質な雰囲気をつけていた。形容するならば他の者が幼き子供ならば、これは黒い大人。そう、この女だけ他の者にはない何かを放っていた。

かと言って美鈴^{メイリン}に負ける気などさらさらない。この女を倒せばそれで終了。だから、手は抜かない。

「行くアルよ」

「ええ、来なさい」

美鈴^{メイリン}が女に疾駆する。女はそれを身構えもせずに笑みを浮かべ、待ち受ける。

「はあ!!」

掌底を女に放つ。女はそれを右手で受け止める。それなりの力で放ったはずだが、完全に受け止められた。掌底を握るその力は女子供のそれではない。美鈴^{メイリン}は後ろに飛ぶ。女は手を離さないものと思っていたがどういいうわけか離れた。そして、次は何？ と笑みを浮かべている。

「ふざけてるアルか？ 純粹な拳闘をバカにしてるアルか？ ワタシも怒るアルよ」

「あらあ、ごめんなさいねえ、別にそんなつもりないんだけどお」

明らかにバカにしたような口調。しかし、それに乗って怒るような美鈴メイリンではない。これが敵の作戦かもしれないと常に頭の隅にとどめている。そうして美鈴メイリンの様子が気に入らなかったのか、女は更にバカにしたように言う。

「遊びだからねえ!!」

「そう、アルか!!」

握った拳を繰り出す。それを女は受け流し拳を美鈴メイリンに放つ。体を回転させてかわし、裏拳を放つ。それを女は掴みとり、美鈴メイリンの腹に拳を叩き込む。

「グッ!!」

「あら?　なんか手ごたえがおかしいわねえ。これが中国の氣つてやつう?」

「さあ、どうアルかね!!」

お返しとばかりに美鈴メイリンが女の腹に拳を叩き込もうとする。だが、それは女に掴まれる。そのまま女に投げ飛ばされた。

「ぐうう」

「あらあ?　もう終わりい?　ねえ、もつと、あら?」

突然現れた氷の刃が女に振り下ろされる。氷で光の屈折を操って行った簡易的な光学迷彩を使った奇襲。女は咄嗟に氷の刃を持っていてであろう人物がいる場所を殴りつけた。何かが割れる音と一人の女の悲鳴が聞こえたと思いきや、トウ力がそこにいた。殴られた衝撃でうめいている。

「あら、ねえ、大丈夫う?　あら、じゃあ、今回はこれで終わりに

しましよう？ 私たちはあ、遊びに着ただけだからねえ、人が来る
みたいだし、それじゃあねえ、中華鍋さんと、冷蔵庫さん」

女は仲間たちを引き連れて露天風呂から外へ消えた。

「なんだったアル？」

「みんな、だいじょうぶー！」

シルが仲居と思わしき人物をつれてきていた。彼女たちが逃げた
のはこのためだろう。とにかく、危険は去った。美鈴^{メイリン}たちはそう認
識した。そして、このことは透には言わないことを決めて、彼女た
ちは透の元に戻ったのであった。

「おう、遅かったな。そんなに温泉はよかったのか？」

暖簾をくぐって風呂場から外に出るとちょうど浴衣を着た透が出
てきたところだった。

「うん」

「そうかよかったよ。さてと、戻るぞ」

透に着いてみんな戻った。この後、彼女たちが襲ってくることは
なかった。

第三十四話 幽霊？

結構な長湯だったみんなも上がってきたのでさっさと部屋に戻ることにする。何か騒いでいた気がするけどまあ、誰もいないはずだし。そういえばさつき擦れ違った人たちがいるけど、まあ、大丈夫だったのだろう騒ぎになってなかったし。

「しかし、みんな浴衣似合ってるな」

風呂上りでまだ髪とかぬれてるから少し色っぽい。いえ、何を考えてるんだ僕は、やめよう。ここには唯でさえ変態がいるんだからとか、思ってたなら目の前にいた。

「透うつうつうつうう！！！」

「天昇下刻拳（唯の右ストレート）！！」

「ぶべらああああ」

変態が宙を舞う。空中で回転しながら飛んでいき、壁に激突。そして、壁にかけられていた絵画が変態の頭に落ちる。更に追加ダメージで変態はどうやら気絶したようだった。

しかし、それはいいのだが、問題なものが見えていた。

「……………札？」

絵画のあった場所にはびっしりとお札が貼ってあった。明らかに何かを封じているような感じのものである。いやいやいや、これって明らかに悪霊を封じてるようなお札だよ……。

「ねえねえ、お兄ちゃん！ お札だよ！！ この前あった肝試し

のテレビでやってたのにてるよ！」

わかってるからシル頼むから言わないでくれ。明らかにそれだから。明らかだから。もう既に駄目だよ。幽霊いるよここ。うわ、こんなことに気が付きたくなかったよ。いやいや、妖怪みたいな存在が近くにたくさんいるからって明らかにこれはやばめな部類だ。

「この温泉には……」

って、うわ！ 復活した変態が何か語りだした。しかも、なんだかホラーだし。ただだけ空気読んでいるんだよこの変態。というか、やめてくれよ本当に……。うん、目の錯覚だ。錯覚。何か半透明の何かが通り過ぎたなんてあるはずねえ。

「ねえ、お兄ちゃん、何か通ったよ」

シル……頼むから空気を読んでくれ。はあ、いやいいよ。確かになにかいるよ。僕も見た。けどさ、信じたくはないじゃないか。人間的に。

「そうだな……」

「幽霊か！ おお、楽しみやな、なあ、ティー」

「……………うるさいだけ……………」

お前ら本当に幽霊にあってそれが言えるか楽しみだな。それにしてもこういうことに一番に反応しそうなエミがまったく反応せずに静かにしていることに物凄い違和感があるのだが、どうしたんだ？

「おい、エミどうかしたか？」

「ん？ い、いや別に何も無いぜ」

明らかに挙動不審だぞ。何かあるようなもんだ。……あ！もしかして……そういうえば幽霊特集とかあつてるときいつもこいつはいなかったな。ふーん、そうかそうか、理解した。

「お前もしかして幽霊怖いのか？」

「ギク！ はあ？ そそそそ、そんなわけ、ね、ねえし！」

ギクって、言ってるぞおい。声も震えまくりだし、モロわかりだぞ。なるほど、エミって幽霊が怖いのかちよつと意外だ。シルとか大好きなのにな。本当に意外だ。まあ、言わないでおいてやろこれ以上言うとなんか駄目そうだしな。

「だから言っているだろう。この温泉には昔、働き者で人気者の女将さんが居たんだ。だが、嫉妬で殺されて、夜な夜なこの温泉を徘徊し恨み晴らすべく敵を探しているらしんだよ」

変態の情報だが、いつもよりは役に立ちそうだ。本当だったらだが。

「敵討ちね……」

「そうだ、敵討ちだ」

敵討ちか。それって、僕たちには関係ないけど、この場合だとよくあるホラーゲームみたいに誰でも良くなってる場合とかあるような気がする。というか、だからこんな風に封印されてたんだろっし。

「ねえねえ、お兄ちゃん、わたし幽霊見たい！」

「うちもうちも！」

「幽霊ってそうそう簡単に見えるもんじゃないぞ？」

「……………見えないけど、聞こえる」

それなら何とか見つけることも出来るかもな。しかし、この面子で誰か幽霊を何とかできるのかな？ 無理な気がするんだが特にエミ。怖がつてる時点で無理だろ。

「父さんに任せろ！！ この日のために色々と習得していたのだ！！」

変態だから物凄い不安だけどとりあえずは何とか出来そうだったから、これで行くか。さてと、じゃあ、ティー頼んだぞ。

「……………わかった……………あっち」

ティーが指差した方向に僕たちは歩き出した。幽霊を探して。

第三十五話 幽霊搜索

というわけで幽霊を探すことになってしまった。事後承諾だったがみんな乗り気だったのでよかった。変態の話を聞いて、この旅館は広いということもあり、2人一組で手分けして幽霊を搜索することになった。見つけたら携帯で連絡しろとのこと。変態はこんなこともあるうかとか言いながら人数分の携帯を用意していた。これ、自作自演じゃないだろうなとか疑ったぞ。それに何で携帯、全機種持ってるんだって話だ。

それで僕はエミと今探してるわけなんだけど。

「あの、もう少し離れてくれない」

エミが僕にこれでもかかっていくつついてきて歩き難い。怖いなら来なければ良いのに。そう言ってもエミは強がってついてきたし。それでこれはやめてほしい。

「そんなこと言わずに頼むぜ。いや、怖くなんてないけどさ。ホラ、なんかあったとき怖いだろ」

いや、こっちのほうが何かあったときに危ないよ。というか怖いって言っちゃてるから。もう認めてよ。そしたら部屋まで送るからさあ。でも、そんな僕の思いはエミには届くことはなく、幽霊を地道に探すことに。

「はあ、じゃあもういいよ」

そのままにしておいて探索を再開する。

「しかし、本当に幽霊なんているのか？」

「さ、さあな」

「まあ、靈感ないから見つからないと思うんだが」

靈感がなければ見ることもできないし、見つけるのだって不可能だろう。僕は靈感なんてないし、エミもないだろう。それで見つけられたら、相当強い幽霊ってことだろうな。しかし、シルは見たって言ってるからな。もしかしたら、相当凄いのが居たりして。ハハハ、そんなわけないか。って。

「おい、エミ何固まってるんだ？」

「い、いた」

「何が？」

「幽霊」

は？ 何が居たって幽霊？ おいおい、僕は何も見えてないぞ。本当に居たのかね？ …………… いたよ。うそお。マジか。目をこするが消えない。どうにも本物のようだ。えっと………… うん、着物を着た女の子のようだ。あの変態が言っていたことは本当だったみたいだな。これテレビとか出したら金稼げるんじゃない？ っと、その前に追わないとな。ここまで来たら正体確かめないと損だ。

「行くぞエミ」

「え」

「え？」

「い、いや、行こうぜ！」

あゝ、まあ、いいか。エミ自身が行こうって言ってるんだし。それにしても、まさか、出るとはな。世の中まだまだ不思議がいっぱいなんだな。いや、まあ、ね、僕の家が一番不思議だけどさ。物

の怪の魔窟みたいなものだし。あいつらを物の怪とか言ったらだめだけど。対外的に見たらそうだな。いや、考えないでおこう。それよりも今は幽霊だ。

幽霊が曲がったと思われる曲がり角を見るが、その先には何も居なかった

「居ないな」

「あ、ああそうだな」

「どこ行つたのやら」

お、誰かかけてきたな。えっと、変態からか。果てしなく出たかないが、仕方ないな。

「はい、何かあつたのか？」

『透か、いやな、出たぞ、本物の幽霊だ。まさか出るとは思わなかった。あの話も嘘だつたのに』

「おい、コラ」

聞き捨てならないことを聞いたぞ。あの話嘘かよ。くそう、無駄に変態を信じた僕が馬鹿だったのか。いや、仕方ないだろう。シルが見たとかいっただし。でも、それで本当にいたつてのが驚きだな。どうやら、さっきのは本当に見間違いないようだ。

『ハハハ、スマン』

ハハハじゃねえよこの野郎。携帯を無意識に握り締める。だが、携帯がギチギチとなっていたので、力を緩める。今度本気で殴らなくちゃいけないようだなこの変態。まあいい、変態はおいておいてこれからどうしようか。幽霊がいるのははっきりしているが、これ以上探しても良いものなのかそれが問題だ。変態の幽霊が敵討ちを

している話が嘘だったから害はないかもしれないけど、幽霊になる
ってことは何かしらの未練があるってことだからな。出来れば解消
してやりたい。

「それで、幽霊はどこ行っただ？」

『知らん！！』

「威張って言うな」

『知らんものは知らないんだから仕方ないだろう。水場じゃないか
？ その辺りに集まると聞いたことがある。それで、もしいたら着
物を――』

変態が余計なことを言う前に電話を切って着信拒否にしておく。
これで折り返し電話が来ても大丈夫だ。さてと、また手がかりなし
で探すことになるのか。どうしたもんかな。水場って言ってもいる
とは限らないし。

「仕方ない。水場に行くか」

そんなわけで水場へ行くことになった。

第三十五話 幽霊搜索（後書き）

ようやく更新することが出来ました。

お待たせしました。

相変わらずリアルは忙しいので不定期更新となりそうですが、がんばって更新して行こうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1854/>

モノもち

2011年5月6日21時57分発行